ぶどうの木

第 15 号

目　次

巻頭言 …… 榎本利三郎 …… 1
牧師館訪問記(五) …… 取材班 …… 2
バプテスマを受けて …… 松尾博子 …… 21
私の歴程 …… 前田サチエ …… 22
食事(カロリー)管理の独習体験と教訓…伊規須太郎 …… 23
老聖徒の思い出 …… 高木敏夫 …… 26
暖かい日，寒い夜 …… 野村末義 …… 29
恵みのあかし …… 花田文子 …… 32
パウロの伝道旅行 …… 古野とみ子 …… 52
病床も神の国 …… 秦タネノ …… 54
さんび …… 伊規須太郎 …… 59
「汝の信仰 汝を救えり」 …… 大石祥代 …… 70
富士山 …… 広田寿 …… 72
きよし …… 正野真宏 …… 73
サフラン会 …… 古野とみ子 …… 77
公開実用新案公報 …… 伊規須太郎 …… 80
「わたしの力は主によって強められた」…綾部時男 …… 84
父の枕辺で …… 正野真宏 …… 88

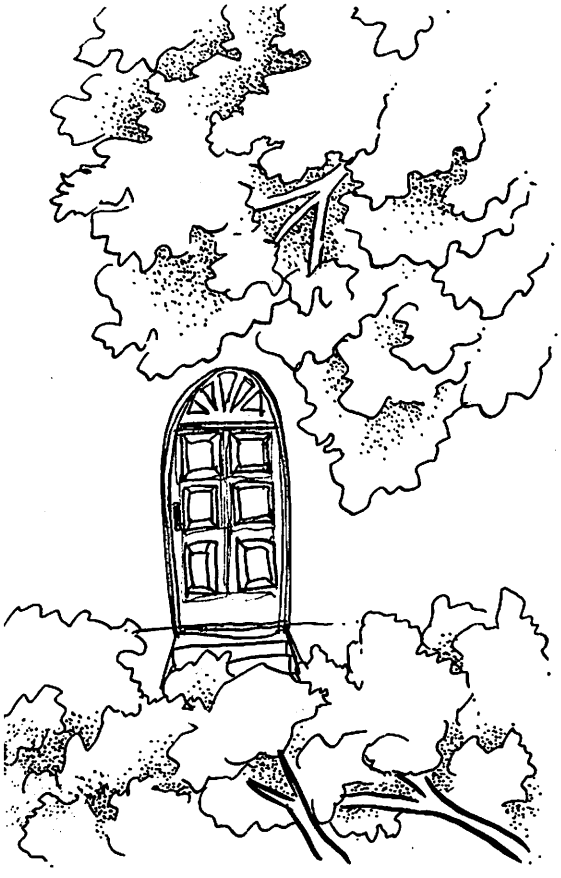
八幡前田教会
大濠公園教会

巻頭言

榎本　利三郎

おゝよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。彼は水のほとりに植えた木のようで、その根を川にのばし、暑さにあっても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂える事なく、絶えず実を結ぶ。

（エレミヤ17－8）



ぶどうの木も15号まで主が育てゝ下さいました。「暑さにあっても恐れる事はない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂える事なく、絶えず実を結ぶ。」とありますように、今年（昭和60年）の夏のような酷しい現実の中に在って、又ひでりの年のような長い長い暑い事情・問題・境遇の中に在りながら、豊かな実を結ばせて下さいました。今茲にぶどうの木15号から、主の恵み豊かな実を一粒ずつ味わいながら、主の愛と力を頂いて更に多くのぶどうの実を結ばせて頂きましょう。

牧師館訪問記（五）

ー「ぶどうの木」取材シリーズー

早いもので牧師館訪問記も五回目を迎えました。今回は、終戦後の混乱を極めた時代に、遭遇するいろんな問題、困難の中をどのように歩んで来られたか、会堂が与えられる前後までを日頃の説教では聞くことのできないエピソードを加えながらお話ししていただきました。

ある牧師館訪問日に、サフラン会を中心としたメンバーが集りました。その日の説教の御言は「信仰に始り、信仰に至らせる。」（ロマ一・一七）でした。それは、これから話される御自分の歩みがこの御言葉の通りであり、どんな時にも終始一貫この信仰の姿勢を貫かれたことを、改めて教えられた次第です。

（文中ー〇〇〇ーの部分は、取材班がお尋ねしたところです。）

一、戦　災　後

先生　前回は、戦災に会ってみんなチリヂリバラバラになったところまでお話ししましたね。それから私達は、家内の母と妹が福岡にいましたので、そちらへ行きました。

奥様　その時は、荷物は壕に入れたままでしたので、着のみ着のままでした。

主人は私達を福岡に送ってから、また八幡に帰って壕を堀ってみると、幸い荷物は焼けずに助かっていたんです。布団も鍋も私がお嫁に持って来た鏡台までもね。

随分大きな壕でした。主人が夜一人で堀ったんです。

先生　私は毎日、福岡から通って焼跡の整理をしていました。戦災者証明というのがあって、それを持っていれば汽車は無料だったんです。汽車は多くて、なかなか乗れなくてね。よく機関車の石炭車の上に乗ったりしたりしたものです。今考えると、よく冒険したものだと思います。トンネルに入るとボァーと（笑い）。

奥様　河本さんとこも毎日のように東郷から出てきていました。あちらも丸焼けでしたので、味噌も焼味噌になっていました。でも水アメ、砂糖とかいくらか出てきて、それをいただいたりしましたので、当時としては本当に貴重なものでした。

その頃、福岡の方には、私達一家が五人で、それに母と妹、弟と嫁、その子供、それに二番目の弟が復員して来ましたから、頭数だけでも十人、それだけの人を食べさせな

ければなりませんので、配給だけではとても足らない。それであっちこっち買出しに出かける訳です。

先生　私は八幡へ行って戦災の後整理に行かなければならない。近所の人が亡くなっているでしょ。その確認をするわけです。たいがいの人は、家の下に防空壕を掘ってその中に避難したものですから、家が焼けて中で蒸し焼になっているんですよ。一酸化炭素中毒のためか、顔色は美しくてね。この人本当に死んでいるのかなと思うほどでした。さわるとズルッとむけてね。

私達は組の共同防空壕に入ればいいと思って、荷物用の壕だけを掘っておいたわけです。

それで、その壕を掘ってみると、荷物が無事だったものですから、河本さんの荷物と一緒に東郷まで持って行ってもらって、そこから福岡まで馬車を雇って運びました。その時一〇〇円だったと思います。それも河本さんが餞別にといって二〇〇円下さってね、またお会いしましょといったものの、餞別と言われるとこのまま会えなくなるのではないかと淋しい気持になったのを思い出します。

―　先生はそのまま福岡に移られたわけですか―

先生　そうですね。どこにもおるところもなかったからね。それから間もなく、西南女学院の方で、軍に徴用されていた時の将校宿舎が自由に使用できるようになったので、それを戦災に会った職員の宿舎にしようというわけで、私にもどうですかと言ってくれたので、それではと、私だけが入って家族がいつ来てもよいようにしていました。

―　それはいつ頃ですか　―

奥様　二十年の秋でしたね。だから福岡には二か月ぐらいいたことになりますね。それから私達の方は五島へ行きました。

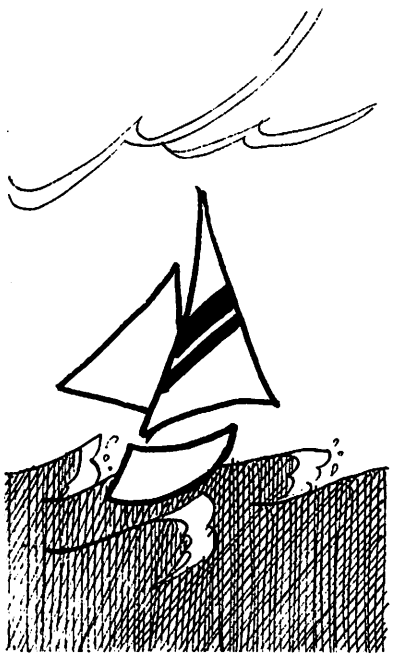
先生　福岡にいても食糧はないしね。やみ米は買わなければならないし、そのお金もないしね。

奥様　その頃、千円で米一俵、大豆一俵が買えたんです。それで、それを買って小倉で暮すか、それを旅費にして五島に行くか考えたんです。小倉に行けば米一俵、大豆一俵で財布は空になりますからそれで終りでしょ。五島（長崎県）に行けばお魚もあるし、食べることは何とかなるということで五島へ行ったんです。

先生　五島から魚を運んで来た船に頼み込んで、帰りの便に荷物を乗せてもらおうというわけで、毎日築港に出かけてキョロキョロ船を物色していたらですね。見知らぬ漁師が

きて「そら、大将」と立派な鯛を二、三匹くれたんです。びっくりしてね。後で考えると、ヤミ市を取り締る　事と間違えたらしいんですね。私の人相が悪かった（笑）、それで思わぬ御馳走になった。そんなこともありました。

奥様　舟に乗って一～二時間くらい経って、海がシケて来たものですから、そのまま進むことができなくて呼子の港に避難しました。私達は宿屋に泊ったのですが、その時もお米を出さないと御飯を炊いてくれないんです。配給の米を持ってまわらねばならなかった。二、三日おったでしょうか。そして十一月二十五日に五島に着き、主人は小倉の方へ帰ってゆきました。



二、五島での生活

奥様　最初は親戚の家に身を寄せたのですが、私と子供を入れて四人、それに弟が加って五人でしょ。いつまでもいるわけにもゆかず、母が送者に貸していた家の一間を空けてもらって、そこに落ち着いたわけです。

そこでまず石油缶を切ってカマドを造り、それでいっぱいお芋をふかしました。ごく原始的な台所でしたけれども、腹いっぱいお芋が食べられることが本当にうれしかったですね。

こちら（小倉）だったら、これだけのお芋を手に入れるとすると、大変な思いをして買い出しに行かねばならぬでしょう。でも、五島の方は知り合いも多くて、ただみたいにして持って来てくれるし、魚も漁に出た舟が帰って来た時港に行くとね、ホーイと投げてくれるんです。ただなんです。私が娘時代、代用教員をしていた頃の教え子が漁師になっててね、それで「末永先生！」といってくれるわけ。（笑）

先生　大きなカゴに魚をいっぱい入れて帰って来るでしょ、一体いくらしたのと聞くと「ただ」というものですから、びっくりしちゃってね。どうしても信じられない。このせ

ちがらい世の中で、何だか別世界へ行ったような気がしましたね。

奥様　そうゆう事で子供はどんどん太りますしね、私も栄養失調が治ったわけです。

畑も起していろんなものを植えましたよ。

先生　冬のある日に私が帰ってみると、シャクシ菜がピューと伸びているんですよ。誰れに作ってもらったのと聞くと、自分が作ったというでしょう。これまた信じられなかった。（笑）

奥様　タキギがありませんから、山にタキギを取りに行かねばなりません。最初はそれをゆわえるのがヘタでね、うまくゆきませんでしたけど、だんだん慣れてきました。それを背負子（しょいこ）で背負って帰るわけです。

肥えも自分で汲み取って肩にかついで処理しなければなりません。それに水もなくてね。井戸が村に一つか二つしかないものですから、そこまで汲みに行くわけです。ツルべで水を汲み上げて、天秤棒の両端に水桶を乗せて、それを担いでバランスを取りながら歩くのです。これは私うまかったですよ。（笑）朝五、六回、夜十回ぐらい運ばないとお風呂に入れない。人数も多かったからね。

先生　私がある時、代って水汲みしたんです。水汲みというのは、大体・女の仕事ということになってて男は誰もしないんです。それを女の人の中へ私が行ってヘッピリ腰でやったもんですから・人の物笑いになりましてね。（笑）

奥様　五島に来た当初は何もないんです。お膳もないし、買うにも品物がないんです。それで村中の知った所へ行ってあっちこっちから調達して来るんです。鍋、釜から何でも……。それで母とか妹がびっくりしてました。姉さんは心臓やねェ、ようそんなに人から貸りきるねというわけです。何でも私が交渉係なんです。

ー　先生、奥さんにそんな力があるとは新発見したのでは……（笑い）ー

先生　そうね、そうゆう外交力というのか、持ってるんですね。

それにしても五島は平和な所だなあと思いましたね。あれは秋の運動会の時だったかな。

奥様　そうですね。小学校の運動会というと村のお祭りみたいなもので、総出で行くわけです。その種目に来ている人のものを拝借する競争があって、その中に「末永先生」というのがあったんですね。

「末永先生、末永先生！」と呼ぶものですから「ハーイ」といって……その時、私着物を着てたものですから、腰をまくり上げて裸足になって走ったんです。（笑い）

先生　僕は別な所で見てたらね、何か和服を着た女の人がバタバタ走り出したでしょ。誰れかいなと見てたら家内でしょ、びっくりしちゃってね。（笑い）

奥様　私が以前代用教員をしてたものですから、私を知っているわけね。それで私も負けちゃならんというわけで……（笑い）

私がいくつの時でしたかなェ、三十才ぐらいじゃなかったでしょうか。本当に健康でね。一日ぐらい風邪引かんかなと思ってました。いつも咲子をおんぶして仕事をしなくてはならないでしょ。

奥様　それから五島の思い出として、和義が海に落ちておぼれたことがありました。

冬の日に、俊雄と二人で遊んでいて、舟に乗ろうとして落ちたらしいんです。三才でしたね。それでポチャンポチャンやっているのを、幸い近くに漁師さんがいて気付いて助け出してくれたんです。もしその方がいなかったら、助からなかったでしょう。

先生　本当に神様のお守りですね。

奥様　それから半年ぐらい経った夏休みに、和義がお腹が痛い痛いと言い出したんです。（丁度、主人も帰っていたんですが）何にも食べていないものですから、翌朝トマトをあげようとしたら「僕、目が見えん。トマトどこにあるん」というんですよ。まあ、これはどうなったのかしらとみんなでびっくりしたんです。

それからますます悪くなって、母が来て脈を取ってみると、欠滞しているというんです。医者を呼んだのですが、相悪く代診さんしかいなくて、どうも難しいですねというだけです。とにかく私共はお祈りしました。お祈りすると脈がおさまるんです。

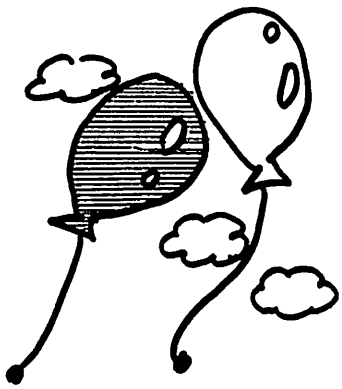
そうこうしている内に先生が来て診て下さったところが、これは自家中毒です、だから絶対何も食べさせてはいけません、今晩一晩が山ですから注意して下さいといって注射して帰られました。

和義は何も食べてないのに水のようなものを沢山吐いて、ただ眠るばかり。それから脳症になっていろいろな事をペラペラしゃべるんです。

私、ここで葬式しなければならないとしたら、真宗の土地だから困ったなあと思いました。ただ、イエス様いやして下さいと祈るばかりでした。そうしたら、見ゆる所はそんなでしたけれど、不思議なように回復して来たんです。

先生　あの時は本当によく助かったと思いましたね。あの頃は今のように薬づけにしないからよかったのかも知れません。

奥様　五島へ行った時の話しに戻りますが、行ってすぐに新円の切換えがありまして、お金は全くないようになりました。主人は小倉におりますし、私は三人の子供をかかえてお先真暗の状態でした。集会にも出られないし、どんな事になるだろうと不安になることもありました。



その時一番支えになったのは「祈れものごとみなままならず、胸に憂いの雲とざす時、祈れよし道は暗くあるとも、祈れすべてを主の手に委ねて」という聖歌でした。咲子をおんぶしながら、これを何度も何度も歌っては主を見上げておりました。

和義の病気の時も、その後も体が弱っておりましたが、その時も聖歌を何度も歌いました。

わずかに残ったお金で食いつながねばならない、これから先どうなるやら、いつ帰れるやら全くわからない状態でしたが、ただ主を見上げてゆく毎日でした。

先生　五島での生活でいろいろ教えられることが多かったですけど、まず、私共が集会に出られるということ、神様の元に近づけることが何とすばらしいことかということです。それだけに礼拝もできない、囲りは全部真宗の中で讃美歌もなかなか歌えない時の魂の苦しみ、渇きというものを、現実私共がなめさせていただきました。

和義が自家中毒で危篤の時、まず告別式がキリスト教でできるかということ、何とか連れて帰らねばならんとそこまで考えたのです。

それで私は、イスラエルの民がバビロンの捕囚で異国の地に連れてゆかれて、そこで川のほとりで異国人から余興

にお前たちの歌を歌えと讃美歌を歌わせられたという記事がありますが、あそこを思い出してね。あゝこんなだったろうなあと思いましたね。

だから今、集会に出られるという事がどんなに感謝であるか、そうゆう経験をしてみるとわかります。そして、遠くへ行かれた方の渇きがよくわかります。それだけに何とか応えてあげたいと思います。

奥様　家族だけで讃美歌を歌って礼拝していました。時には山へ行ったりして、大きな声で歌いました。

ー　私達だったら、信仰を失ってしまっていたと思います。ー

奥様　そうゆうことがありましてね、五島の一年三か月というのは、神様がその都度その都度助けで下さいました。

それから、私達が入居していた、以前診療所だった所を解体して返さなければならなくなったので、それではこの際北九州の方へ帰ろうということになったのです。

ー　奥様と子供さん達が五島にいる間、先生はどうしておられたのですか。　ー

先生　その当時、西南で非常勤講師をしていましたが、日曜日は河本さん宅で礼拝を守っていました。河本さんは焼け出されて一年後に今の所に家を建てられたのです。

それまでの間は、家庭集会をやっていましたね。西南の教え子のお宅や、高見町社宅での集会、元八幡市長の守田さん宅、それから友の会の方でも集会を持つようになり、柴原さん、島崎さん、中原さん、それから小倉の友の会の方でも太田さん、森岡さんが救われました。河本さん宅で礼拝を守るようになってから岩隈さん、今本さん（現中村）が学生で来られるようになりました。

三、のぞみが丘時代

先生　昭和二十二年の一月に帰ってきて、現在の井堀のところにあるのぞみが丘の西南の宿舎で家族が一緒に住むようになりました。

その時はもう河本さんのお家は建っていましたから、河本さんのお宅で礼拝を守りました。

奥様　その当時の一番の思い出は、主人が病気したことです。その年の八月十三日でしたか。

先生　それはね、すぐ下が井堀でしょ。そこで盆踊りがあるのを俟雄たちが見たいというので、連れてゆこうとしてた時に気分が悪くなってやめたんです。そしたら、ポッポ、

ポッポ熱が出た。

奥様　体温計はないんですが、すごい熱でした。水枕もないし、とにかく井戸の水で冷やしますけど、湯気が上るほどなんです。それで西南の養護の先生にお願いして検温したら、四十度近くありました。

主人は医者にかかることを好まないものですから、私もどうしょうかと思って、ただイエス様どうしたらよいでしょうかと言いながら祈るばかりでした。

とにかく明日が日曜日で礼拝に出られないから、ことわりにゆかねばと思いついて行きました。河本さんも「それはいけませんね」とおっしゃって、当時としては珍しい果物を冷してあって、それを下さったのです。私も元気づいて、一緒にお祈りをして、帰りに魚屋さんに寄って氷を買って帰りました。そして、頭を冷してたゞお祈りをするばかりでした。

翌日、十時すぎに思いがけず、能美さんが来て下さったのです。礼拝に出て来て、先生が病気で休みと聞いて来てくれたのです。うれしかったですね。わぁ、ありがとうというて・・・・。

それでは三人で礼拝しようというと、主人も起き出して一緒に礼拝したんです。主人は短い御用をしましたが、終った頃からスーと熱が引いたんです。

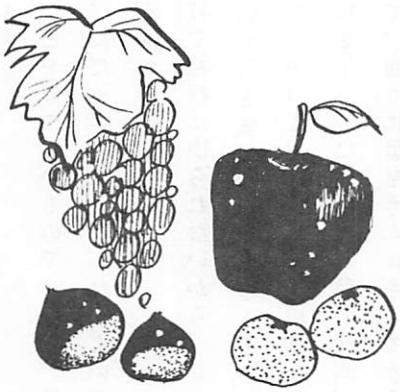
その前日、養護の先生から尿を取っておいて下さいと言われておりました。そして・お宅はどうして医者にかけないのですかと言われて、「はあ」とは言ったものの、私自身どうしょうか迷っていました。主人に言っても、見せなくていいと言うにきまっているし、お医者に来てもらおうかとも考えたけれども、まあまてまてと思って一夜を過したのです。

その日、尿を取ったのがひどかったですね。真赤というか、チョコレート色というか、その中にユラユラとゼラチンのようなものが浮いているんです。何という病気か今もわかりませんけど、それっきり回復に向って、少しずつではあるが食欲も出て来ました。何か栄養のあるものを食べさせなければと思いますが、お金もありませんので、配給のタバコを持って小倉の飲食店へ行ったんです。そしたら、二百円ぐらいで売れたものですから、いっぱい美味しいものを買って帰って来ました。

先生　その時、能美さんが二日も泊って助けてくれました。谷間にある井戸から水を汲んでくるやら、冷やすやら、タ

キギを割るやら、本当に助かりました。

奥様　主人が病気になったひとつの理由は、疲れだと思います。私が七月十三日に豊を出産したのですが、その時、誰れも看病人がいないものですから、私が寝ている間、三人の子供の世話から赤ちゃんの世話、水汲みまで全部一人でやらねばなりませんでしたからね。



四、牧　会　専　念

先生　二十二年の一月に帰って来て、その年の九月第一日曜日に会堂の献堂式がありました。河本さんが「先生、マッチ箱のようなものですけど、御用のために用いて下さい。」というてね。

奥様　もともとそこは河本さんの土地ではなかったのですが、戦災後河本さんが買われたのです。その地主さんというのが、正野さんの親戚先になる方だと後で聞きました。

私共も、この近くに教会を与えて下さいと祈ってたんですけど、戦災に会ってからこのように与えて下さるとは、夢にも考えませんでした。ですから、河本のおばあちゃんが「教会は焼け太りですね。」といってました。

―それは先生がおいくつの時ですか―

先生　そうですね、三十六か三十七才の時でしょうね。

奥様　九月に献堂式をしまして、そして西南の非常勤講師をやめたいというのですよ。

先生　それまでは会堂は河本さんの二階座敷を借りていたんです。教会と牧師館が与えられるのがうれしくてね。神様はこんなに備えて下さった。これまで伝道一本でゆきたいと願って、こうゆう中を通って来たのだから今度こそと思って、背水の陣を敷いて、神様にまず従ってゆこうと西南の方をことわることにしたんです。

奥様　その頃の生活費は、千円あればまあまあできました。

講師手当が三五〇円だったんです。お隣りに門司のパプテストの先生がおられたのですが、その方は社会科の専任講師になられたので、千円くらいあったと思います。それで割りあい苦労しなかったようですけど、私共は三五〇円を基本にしていますから、配給のお米と野菜を買う程度ぐらいです。そうゆう状態で、その三五〇円も今度なくなるわけなんです。

先生　のぞみが丘におって礼拝に河本さんとこに来て、礼拝献金の中から$\frac{1}{10}$をのけて残りを牧師の生活費ということにしましたから、帰りに五条で降りて市場でいくらかのものを買うと、翌日からの生活費がなくなるという状態でした。

ある時、電車道にある風呂屋さんに寄って帰ろうと入口でいくらになるか計算してもらったら、それだけ使ったらあと食べる分がなくなる。「まわれ右」というわけで、帰って行水したこともありました。

そうゆう経験もあります。だから、パウロが「われ貧しきにも、飢えるにも、富めるにも熟練せり」といっていますが、程度の違いはあっても、パウロもこうゆう中を通ったのだろうなと思いました。

ー　先生が西南の講師を辞められることについては、やはり奥さん子供さん達の生活という責任があることも考えられたと思いますが　ー

先生　いやね、それが私冷いですね。それを考えなかったんです。死ぬのならね、死ねばいいんだと・・・。神様に献身したんだ、文字通り身を献げたんだから、神様が責任もって下さる。他の人と違って献身者なんだから、神様の手に握られているんだから、使命が終れば神様が召されるだろうし、それならそれでいいじゃないかと考えたわけです。

しかし、家内の方は、三五〇円の穴があくわけですからね。大人は何とか使命でゆくけど、子供は生活できなくなれば栄養失調になってどうしますかって言うんですね。

奥様　非常勤講師ですから、ある時間行けば三五〇円もらえるんだから、何とかと思うわけね。

先生　それはね、前に院長さんが「榎本さん、あんた専任講師になってもらえないか」と言われたんです。けれども私は、非常勤で行くことすら、心の中で道を踏みはずしているような気がしていたものですから「私は伝道者です。伝道することが私の使命ですから」というと、「榎本君、伝道は夜もあるし日曜日もできる。昼間でも伝道の都合があ

れば空けることもできるからならんか。そうしたら、これくらいあげられる」いうわけです。それこそ喉から手が出るくらいの金額なんです。（笑い）

けれども「まず神の国と神の義とを求めよ」まず神に従うのが私の使命だから、そのための証し人なんだから、私は神様に従う「先生、折角の御好意ですけど、私はなりません」と辞退したんです。そうすると「榎本さん、あんたがそれだけ真剣であるならばおしいから、ひとつ学院専任のチャプレンになってくれないか。何人かの牧会者になるのと、何百人の生徒に伝道するのとどちらがよいか。こっちの方がやりがいがあるではないか」というて下さったんです。「それは伝道のチャンスとしては多いかもしれないけれど、神様の導きはどこにあるかといえば、私は証人として召されているんだから牧会伝道にあると思います」といったんです。当時はまだシオン山教会はなくて、いわば宗教主任のような形になるわけです。

奥様　その時、私は何とか専任教師になってもらえまいかと願ったんです。けれども、主人は絶対にならんと言います。

主人も戦いだったと思います。

先生　女の人はどうしても現実の問題と直面しますから、その点で戦いだっうと思ったんですが、しかし、私が召された使命は証人として、神は生きていらっしゃるという証しなんだから、それができないなら死んだ方がいいくらいの気持ですから・・・・献身者なんだから、死ねばいいんだというわけです。

そうするとね、「あなたがその気持なら私も覚悟します！」

奥様　まあ、覚悟しなければならなくなったんです。私には信仰はないんですけど、ついてゆかざるを得ないわけですよ。主人がシャンとして一歩も引きませんからね、その点においては・・・・。ですから信仰もってゆこうと思ったんです。

ところが、不思議なことに神様がね、そう決心したものには神様の方が責任をもって下さるんですね。

それもね、バターの配給があるからバターを取りたいと思っても、三〇〇円くらいかかる。代用食にでもバターをつけて子供達にやりたいと思いお祈りしていると、不思議なことにそれだけのお金が与えられるの。

それで、私がエリヤを養われた主を知ることができたんです。私には信仰も何もないんです。それこそ主人を引き

降すような私ですけど、やっぱり何とかしてついてゆこうという願いをもった者には、主が責任をもって下さるんだなあとしみじみ思いました。

アメリカの見も知らない方から、お金やら靴や衣類を送って下さるわけです。子供に着せられるものや私が着れるものは着ますけど、大きなものや合わない靴なんかは黒崎に委託販売してくれるところがあって、そこに持ってゆけば売ってくれるわけです。赤い靴なんかは小倉のヤミ市に持ってゆけば売れました。その代金で神様は生活させて下さいました。

先生　それが全然期待できない、期待しないことですから、こちらはビックリ、ビックリしながらでした。

あのエリシャの時でしたか、預言者の奥さんが生活に困ってエリシャの所へ行ったところが、何があるかと問われ、ビンの中に油が少しというと、油を入れる器を全部持って来なさい、近所からも借りて来なさいというて沢山もって来させ、次の日戸を閉めて次々ついで行ったところが、みんな油でいっぱいになった。それでこれを売って生活しなさいという記事がありますね。あのとおりだと思いましたね。

奥様　本当にあの記事のとおりでした。

私はそうゆう事を通して、主は今も生きていらっしゃる、信頼する者を恥かしめ給わない方ですよという事を、主が教えて下さいました。

会堂ができて二年ぐらいして豊が召されて、それからここで末永先生に来てもらって聖会を開きましたが、その時に講師謝礼が差し上げられないんですよ。

その日の礼拝献金が二千円くらいありましたので、それをそっくりそのまゝ先生に差し上げたのです。そうすると、その一週間は私達は飲まず食わずでおらなければならないんです。するとね、それだけは神様はまた与えて下さる。しかもその週に一本当に不思議でした一どこからか書留が来て、ちょうど二千円入っていました。

カラッポにしておいて、神様は必要を満して下さる。そのことを神様は私に身をもって教えて下さいました。その後も必要を覚える時もたびたびありましたけれども、あの時与えて下さった神様、今度はどのようにして与えられるか、危機一発の時神様はきっと与えて下さるという信仰をもつことができました。

子供達が大学へ行くようになった時、和義が「貧乏の中から、僕たち二人を大学までやるからなあ」とか言いました。その時、私は「はあ、貧乏？」自分としては貧乏と思っていないわけですよ。そうゆう気持はないんです。主が与えて下さるというのでね。そう言われて「はっ」と思ったくらいですけど、本当に主は真実をもって応えて下さいました。

先生　そうゆう中を通りましたけれども、貧乏だ貧しいという感じを全く持たない。神様がこの中を通していらっしゃるんだ、だから神様に従えばいいんだ。それだけでした。そうしたところが、さっき話したように和義から貧乏と言われて「ほう貧乏か」というわけです。ないのが当り前と思ってますから、貧乏と違うんです。

一つは、国全体が物に乏しい時でしたから、貧乏ということも苦にならなかったのだと思います。

奥様　主が与えて下さるのだから、与えられたもので食べればいいということですからね。

先生　そうゆう意味では「手ばなしで主に信頼」ですね。

私はそれを使命とし、喜こびとしてゆけるのですが、家内の方は大変だろうと思います。というのは、そこまでの信仰はないでしょう。背伸びして、フーフーいうてついてゆかねばならんことになるのでね。

今はこうして笑って話せるのですが、当時は随分悲愴だったろうと思います。

奥様　やっぱりね。財布の中を見ては・・・・ふくらんだ時は信仰はいいけど（笑い）財布がしぼむと信仰もしぼんでしまう。

先生　そうゆう中を通ることによって、空っぽになったら、やあ神様が満して下さると楽しんで待つように神様がして下さる。

奥様　そうなるまで随分かかりましたね。

子供達が五才ぐらいの時から二十才くらいになるまで・・・、それぐらいになると俊雄達に「大丈夫よ与えられるから」ということができるようになりました。

子供が小さい間は、ハラハラしながらでした。今考えると、あの時が一番良かったなあと思います。

ー　話しを前にもどすようですが、会堂が与えられて、先生が牧会に専念されるという事は、信仰上の一つの転機ではなかったかと思います。ちょうどイエス様が公けの生涯に入られる時、荒野の試みに会われ、栄耀栄華を見せられて、別な生き方を誘われたことが記されていますが。ー

先生　そうですね、その事はその前にすんだと思います。講師の問題はね、講師になるかならないかというところからその問題がかかってくるわけです。また別にクラスメイトの人が自分の工場を週一回でいいから見てくれんか、そうしたらこれだけのものを上げるというてくれた事もあるんです。それは時間的に伝道に支障があるわけではありません。誰れも行くなとは言いませんし、神様も行ってはいけないとおっしゃらないけれども、私の良心がそれを許さないのです。そういう事をして生活をしたということがどこまでも尾を引いて「大丈夫です」と確信もって言えないでしょ。で、神様に従えなくなってしまうから、神に従えない道はカットしなければなりません。

そうゆう事で、何べんかその問題を通って来ているから、会堂が建った時、神様が伝道に専念できるように道を開いて下さったのだから、これにかけてゆこう、ただそれだけでしたね。

しかし、神様はそれだけ信頼すれば、その信頼に応えて下さる方だという事を現実の中で学ばせていただきましたね。

奥様　まあ、クリスチャンの伯母の所におっていろんな話しは聞いてきてはいるが、現実主が今も生きておられるんだということは触れて知るほかない。

私にとってはよい神学校でした。主からじかに神学校で学ばせていただいたわけ。

私は神学校へ行っていませんし、そうゆう事は何もわか

らないんですけど、主は生きていらっしゃるという事を学ばせていただきました。

先生　結婚する時にね、伯母の所で一か月ばかり祈って、御言葉が与えられてこうゆう生活に入ったのだけれど、献身者としての修養を受けていないし、神学校に行ったわけでもないので、神様が直接その中で訓練して下さったのだと思います。

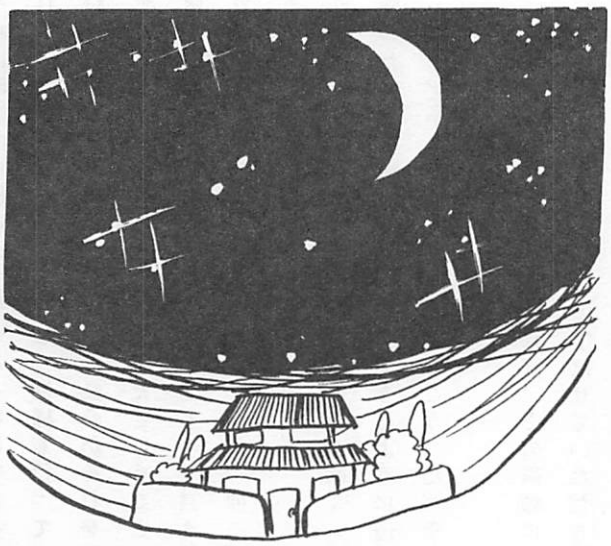
五、二人の子供の昇天

奥様　それから子供が天国に召された時にも、私の生涯にとって一番悲しい出来事でしたけれども、それを通して主がどんなに御愛の方であるか、また全能者であるということを二人の子共の死・・・一人は腸閉塞で生後十三日でしたが、生れて三日目に黒いものを吐いたのです。

先生　お乳は飲むんですけど、しばらくすると、いやぁな顔をするんです。気持悪そうにしてバァーと吐くんです。そして黄色い便のようなものを吐くようになりました。

お医者さんは、三つのことが考えられる。一つは腸の一部が麻痺して排便ができない。二つは腸の神経ぜん動が止っている。いま一つは腸閉塞、もし腸閉塞だったらこれは先天的なものだから今の医学ではどうしょうもないということでした。

とりあえず、ぜん動を促進させる注射をしたところが、腸が激しくぜん動しているのが見えるんですが、便が出ない。それで「榎本さん、これはあきらめなければ仕方ありませんね。奥さんには可哀想だけど・・・私が行って話しましょうか。」と言ってくれたのですが、私も牧師ですから私から話しますといって家に帰ったんです。



ー　それはいつ頃でしょうか　ー

奥様　二十三年頃だったと思います。会堂ができた翌年に豊が亡くなり、次の年でしたから・・・・。咲子の次が豊です。生後六か月で・・・・。それも自家中毒でした。

その子が亡くなって、次が「恵」という男の子でした。一応名前はつけていたんです。あの子がお腹にいる間に、豊の悲しみと母親の精神的な胎教が影響していたのではないかと人間的には思います。二人の子供が同じ年に天国に行ったんです。一人は一月、一人は十一月です。その時が非常な試みの中でした。

その頃、ロマ書十一章の「万物は神からいで、神によって成り、神に帰するのである。」（三六）「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。」（三三）この御言が私にはどうしてもわからなかったんです。「イエス様、私はどうしてもこの御言が心から信じられません。」主に訴え祈っていました。

それが本当にわからせていただいたのは、恵が生れて亡くなるまでの間に、私が主とお話ししている時に教え給うたことは、「万物は神からいで、神によって成り、神に帰する。」これは神の御計画であって、わざわいではないのだと知らせて下さった。

豊の時は、こうすれば助かった、ああすれば助かった、私の手遅れでこの子を死なせた・・・・それが一月からズーッと私の悩みだったんです。人間的な方法を何もしないで手遅れさせて死なせてしまった。私が悪かった。自分を責めて責めているでしょ。それが思い上りであって、主に祈ってこうなったのだからと、その時主がじゅんじゅんと語りかけて下さったんです。

そして「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」という御言が、全面的に「ああわかりました。信じさせていただきます」と、本当にヨブが神の前に手を口に当てんのみ、思い上っておりましたと言ったように申し上げたのです。主の御愛と御計画を全面的に主を主として信じてないわけですよ、私がね。

先生　豊が与えられて、スクスクと成長してゆく姿を見て、神の恵みを感謝して来たのに、こんな形で召しなさるなら何如神様は与えなさったか。こんな苦しい思いをさせるくらいなら与えなされなければよいのに・・・・そうゆう気持もあったわけですね。母親としては無理もないこ

とですが。

だから、自分が手落ちしたんだ、あれしとけばよかった、あれ飲ませねばよかったと盛んに言うて自分を苦しめるんです。

そうじゃないんだ。「万物は神からいで、神によって成り、神に帰する。」一つも神様は無駄なことをなさらない。神様の許しがなかったらこの豊も生れて来ないし、召されることもない。これは何か神様が深い御旨を教えて下さっているにちがいない。神様から出たことだから、今はわからないけれど、悪いことはなさらないんだ。あんたのせいではないんだと言うんですけど「いやそうじゃない。私が殺した。」

それで私、その時皮肉って言ったんです「あんたは偉い。それだから苦しむんだ。人を生かすこと殺すことは神様しかできない。それを自分が殺したというのは、あんたは神様より偉い。」そうも言うてみたりしたんです。

奥様　本当に一月から十一月の恵がお腹にいる間というものは、精神的にも肉体的にも全く最低の所でした。

神様の前には、私達は何を言われても従うべきなんですね。それを神様がわからんものですから、人間が王様になって、神様それはいけません、こうでなくてはなりません。そう言っている間は、平安も何もないんです。そこの所を通らせていただいて初めてわかりました。

先生　だから、人間的な方法でさえも、もし助かるとするならば、まして神様に祈って助らないことはない。その神様に祈ったんだから悔いはない！と私は言うんですけど、まだ何かすればと思ってるわけです。そこが食い違ってね。

奥様　主人も戦いだったと思います。子供は天国に召されているんだから、ここに見ている子供よりも大丈夫だと主人は言うんですけど、私がそこまでゆかないんです。

先生　そう言えば言うほどザクザク痛むのでしょうね。だから余計こちらに返って来るわけですね。

奥様　御利益信仰だもんですから、愛なる方ならもっとこうしてくれてもと思うんです。

―　冷静になれば、先生の信仰もよくわかります。しかし、もし私達がその場になってみると、やっぱり百合子先生の御気持になるのは当然のような気がします。それこそヨブの奥さんのように、神様をのろって死んでしまいなさいということになるのかもしれない　―

奥様　それでね、十一月に恵が天国に召されてから、能美さ

んが来て「奥さん、先生達は一生懸命伝道しようっしあとに、なんでこんなに次から次へとわざわいがあるとやろか。」というわけ。ちょうどヨブの所に友達が来て言ってるのと同じでね。（笑い）その時は私自身解決していたものですから「能美さん、そうじゃないのよ、こうこうなんですよ。」と言いますとね「アラ、案外しっかりしちょるたい。」

（大笑い）

それでね、能美さんも安心したというてね。

先生　これを通して、信仰が主にピシッと決まるように、お恵みでして下さいましたね。この試験を通過したものだから、後は神様は同じような中を通しなさらなかった。

奥様　御利益信仰から主を知る信仰へと導かれたわけですよ。この二人の子供を通してね。

先生　だから、この二人の子供は、私共のガイドとして、導き手として遣されたすばらしい使命を果して行ったんだなあと思います。今この御用をさせていただくこの信仰は、あの二人の子供が神様から遣されて置土産としていったのではないかと思うんです。

ただ二人の子供が死んだということのようですけど、その影には主の深い恵みと導きがあることを教えられました。

ー　お話しを伺いながら、神様は神の器として育て用いるために、ちょうどエリヤがザレパテあるいはケリテ川へ行ったように、いろんな中を通しなさるんだなあということを感じます。ー

先生　私もいつもその事を思います。あれでエリヤも「わが仕うる神、エホバは生く」という信仰が与えられたんですね。

だから神が選んで御用をさせようとする時は、特別の訓練をなさるんですね。神は愛する者を鞭打ち懲しめるとおっしゃる。神様は高い期待をもっておいでなさる。私共はいつもここに目をつけていないといけないと思いますね。

ー　水に耐えられる者は水の中、火に耐えられる者は火の中を通すと書いてありますが、何だか恐い感じもします。しかし、神様はすべてを御存知で、弱い者は弱い者なりに導いて下さいますから、ねんごろな方だなと思っています。ー

先生　確かにそれがあります。また通すためには逃るべき道も備えて下さいますから、それを何べんか経験すると大丈夫と思い切って従ってゆけるんです。

初めはびっくりしゃっくりして、どうしてこんなとこを

と考える。しかし、私達はどうしてかということは考えなくていいんだと思うのです。どうしてかは、向うが知っておって下さる。だから全幅に信頼することです。そうすれば本当に自由がある。平安がある。命がある。

信仰に始まり、信仰に至らせるとありますが、途中で何かと混ぜるから失敗するんです。何かどうかあれば、途中で引き返して、もう一度建て直すことが必要ですね。

先生　一度そうゆう試験を通りますと、後が楽になりますね。その後も子供達の進学の問題、就職、結婚というような問題もありましたが、あの時「主が生きていらっしゃる。善にして善よりほかなし給わない。」ということが肌で教えられているから、祈ればいいんだ。祈ったらあとは委ねればよい。信頼して信頼して歩ませていただけるようになりましたね。

ー　今日はどうもありがとうございました。ー

バプテスマを受けて

松尾博子

私はこの四月九日、多くの方々の讃美と祝福のうちに受洗させていただきました。

求めておりましたところ、神様の導きによってこの前田教会が与えられ、その会員の一人として共に同じ信仰の道を歩ませていただける恵みに深く感謝致しております。

バプテスマを受けること、私はこの形を境に自分の心の変化に期待しておりました。それはすべての罪が許され、平安と喜びに満ち溢れる事でしたが、しかし、受洗後の私は許されたという実感より、私の中にある罪をはっきりと知らされました。それは思いがけず頭をたたかれた思いでした。考えてみますと、それまでの私の罪の意識といえば、極めて漠然としたもので、それを具体的に正面から見つめ、そして真剣に悩む、そんな経験がほとんどなかった事に目が覚めました。今さらという感じで、軽卒というか、不真面目というか、まったく恥じ入っております。そんな状態で許される喜びのあろうはずがありません。

罪が見えだすと次から次へと、顧ましても古い私は世の人の思いをしっかりと胸に抱き、その中を唯ひたすら突走ってまいりました。それでも精いっぱい歩いた自分の過去にはそれなりに意義づけたいと思うものの、今にして思えば、罪を罪と感じない暗やみの世界でしかなかったのです。そんな何ひとつ誇れるものを持ち得ない自分をこうも次々と思い知らされた時、目の前にあるのは、やはり自分への失望でした。

「あなたがたは先の事を思い出してはならない。また、いにしえの事を考えてはならない。見よ、私は新しい事をなす。あなたはそれを知らないのか。」

（イザヤ四三・一八～一九）

五月二十日、礼拝でこの力強い聖言とメッセージが与えられたその時、私のすべてに語られているような、云いようのない喜びと希望が広がっていくのをはっきりと感じる事ができました。

あつかましく先走って安易に平安と喜びを追い求める私を、神様は罪の自覚という原点へ引き戻されたと思います。厳しいけれどその中に順序を正して近づいて下さる御愛を感じます。そして私にとってバプテスマとは、これから歩くべく、〝悔い改めの人生の出発点〟であったと思うのです。

受洗からもうすぐ五ケ月。まだよくわからず小さくは迷っ

ても、礼拝も回を重ねる毎にこの私も潔めて頂けるという確信の深まる此の頃です。

「私達が神を愛したのでなく、神が私達を愛して下さって、私達の罪のためにあがないの供物として御子をおつかわしになった。」（ヨハネ第①、四・十）

こんなに一方的に愛していて下さるこの神様が共に歩いて下さるのですから、恐れずこれからの新しい人生に大きく期待して行きたいと思います。

（一九八四年八月記）

「私の歴程」

前田　サチエ

子どもの頃、父親のポケットから小さな手帳がはみ出しているのを見つけ、めくってみましたら、講習を受けた時のものだったようで、子どもの素行が悪いのは愛が足りないからであるとキリストが言ったと書いてありました。

私が二十才前後でしたか、兄が尼ケ崎に居りました時、暫くいっしょに住んでいたことがありました。（その兄が菅原多美子の父です。）そこで近くにある教会に通った事がありました。その時、純福音教会を知りました。神様はその時から救って下さるために計画を立てて下さったことを思い、感謝にたえません。

その後鹿児島に帰り、近くの教会に行ったりしましたが、少しも満足ができず、尼ケ崎で行ったような教会は見つからずあきらめたりしましたが、時折り思い出してはお祈りしておりました。

終戦後、小倉へ引き揚げ、八幡に移り住むようになりました。

神様は先回りをして、私を待って居て下さいました。でも

教会に行くには献金がいります。その僅かな十円金貨があるかしらと気づかったものです。定まった収入もなく、小倉の租父の家から不用品整理の意味もあったのでしょう。様々な品物を持って来てはお金に代えておりました。時には思いがけない金目の品物があって、大喜びしたこともありました。バラック建ての狭い家に住み、家族が眠ると座ってお祈りする場所もなく、朝も夜も軒下に立ったままお祈りしたものでした。

また、食料不足を補うために慣れない畑仕事などをしましたが、何も手を加わえることをしない、柿や枇杷がたくさん実って子ども達を楽しませてくれ、感謝にたえませんでした。

それから、三十数年様々な中を通って来ましたが、親よりも誰よりも私を愛して下さる神様がいつも私といっしょに居て下さり、力となって総ての盾となって下さいます事を感謝し、朝に夕べに主を崇めさせて頂いております。

食事（カロリー）管理の独習体験と教訓

伊規須　太郎

一、経　過

はじめたキッカケは高い血糖値

昭和五三年十月頃、保健所の集団検診で三二二ミリグラム（糖尿病範囲は一三〇以上）。身長一六六センチ、体重七一キロ。↓医師の指示で摂取カロリー一四〇〇を厳格に守り、約半年で体重は六一キロへ。まもなく血糖値もほぼ正常へ。↓以後食事を一六〇〇カロリーとし、定期的に検査を続ける。血糖値も安定。↓現在も食事管理と若干の運動を続けています。

（肥満記録・・・昭和四三年頃と思います、最高八四キログラム！）

二、教　訓

意識革命が第一。まず秤量とメモを習慣付ける

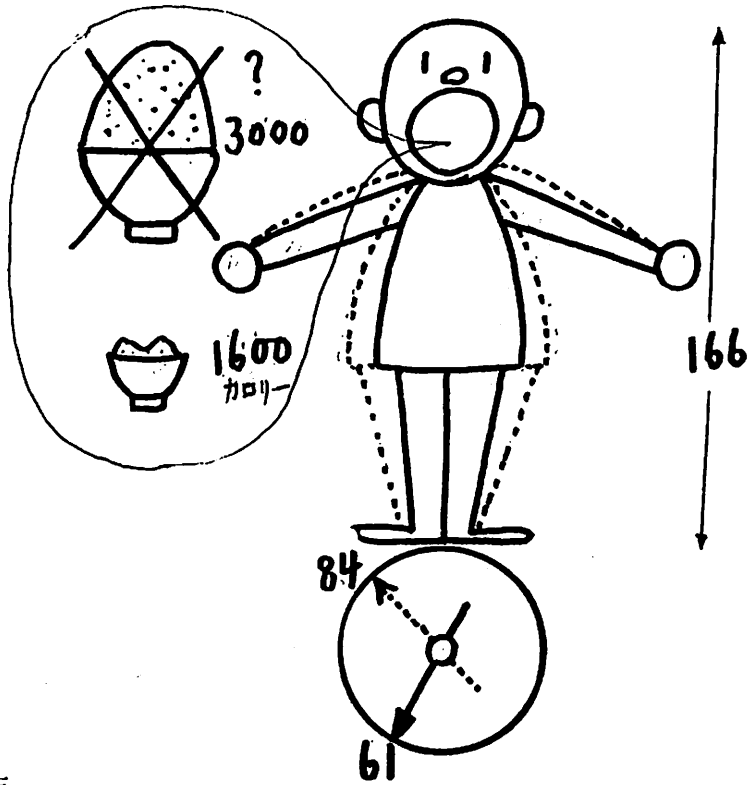
① 食事が気になり、何らかの管理が必要と思ったら「食事こそ生き甲斐」と言う考えを捨てること。（舌で食べずに頭で食べる？）

聖書には何と言われているでしょうか。

旧約・伝道の書一〇章一六―一七節、

「あなたの王はわらべであって、その君たちが朝から、ごちそうを食べる国よ、あなたはわざわいだ。あなたの王は自主の子であって、その君たちが酔うためでなく、力を得るために、適当な時にごちそうを食べる国よ、あなたはさいわいだ」

思慮なく美味に酔う不幸と神様から力を頂く為に感謝して食事する幸福が対比されています。



② 減量の為に急激な事をしても効果はないし長続きしない。

③ ヤミクモに食事を抑えるより、現状を把握する。はかりとメモを常備する。案外不足している食品があるかもしれない。

④ 枠を守れないからと、あきらめないで、超過したらその分をつかんでおく。但し翌日の前借りや、前日の（余り）枠の繰越しはしない。

⑤ 体重は毎日計るが、目安であるから一喜一憂しない。それによって食事の量を増減したりしない。

三・工　夫

① ゆっくり食べる。

② 空腹ならば、おかゆ・おじやも一つの方法。

③ 食品の計量の際、おぼえのため、特別な円盤を工夫し

た。円盤の周囲に重量の目盛りを入れ、白い洗濯ばさみではさんで白色野菜の重量を覚えるというふうに。

④　メモ用紙の様式や記入法の工夫

四、現　　状

馴れたら煩わしくはない

①　小さな紙片（九センチと十二センチの中に一日の全食事を記入します）に、ちょっとメモするだけで、煩わしい事も、窮屈な事もありません。食品交換表（項目V.に出て来ます）を開くのは数日に一回ぐらいです。

②　何でも頂きますが、無茶には食べません。はかりの無い所でも、なるべくカロリーの見当も付けます。

③　過ぎたか過ぎていないか、思い煩うことがありません。過ぎてもその程度（カロリー）がわかっていますから安心です。

④　ただ、人との付き合いが若干悪くなるかも知れません。

五、提　　案

①　家庭に食品交換表を備えられると良いと思います。

書　名　「糖尿病治療のための食品交換表」

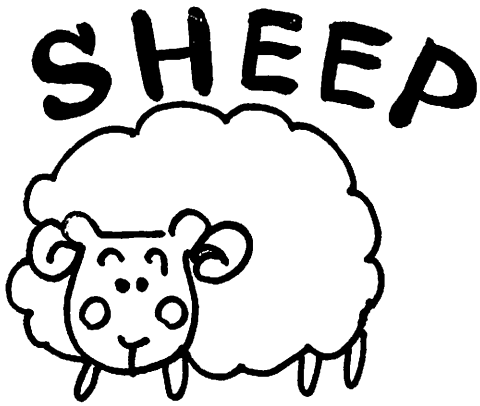
編著者　「日本糖尿病学会」

発行所　「文　光　堂」

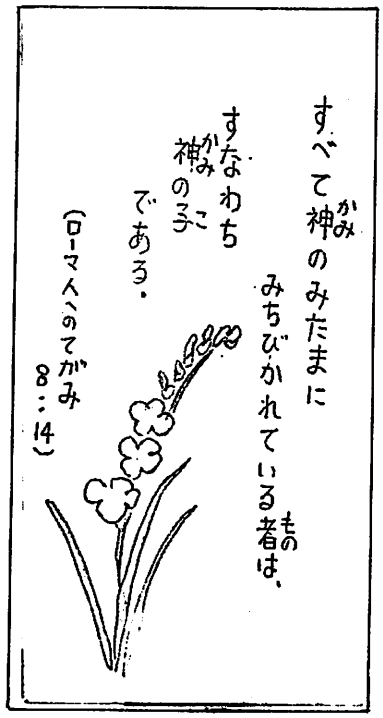
価　格　昭和五三年現在三〇〇円

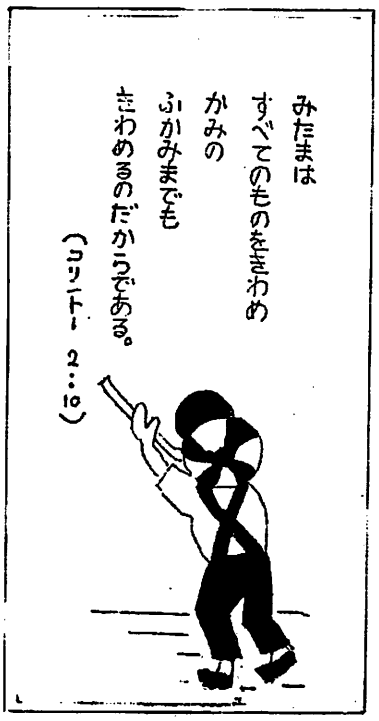
類似の本は他にもありますが、この本が一番良い。B6版で形も小さいし、不必要なカラー写真などもない。保健所でもすすめていますし、取次いでくれると思います。「糖尿病の・・・・」とありますが病人食でなく、健康食の手引だと思います。

②　家族の中で、ある個人について食事管理する事は、かなりむつかしいと思われますので、全体を把握しておいて、とり分ける際の比率（目見当でもよい）で大体のカロリーを計算する、これでも、何もしないよりは遥かにまさっていると思います。



昭和四八年「ＣＳ御言カード」から





老聖徒の思い出

高木敏夫

『彼は死ぬれども、
信仰によって今もなお語る』
（ヘブル人への手紙十一・四）

私が敬愛してやまなかった大野季太郎老兄は、去る五九年六月二日、心臓発作のため、天の御国に凱戦された。享年八十七歳であった。

二日の朝、牧師夫人より電話があり「大野さんが心臓発作のため、危篤状態にあるそうです。お祈り下さい」と知らせて下さった。私はすぐに、家内と心を合わせ、主にいやしを祈り求めた。

昼すぎ教会の掃除から帰ったが、気にかかるので大野さんの住んでいる老人ホーム「寝屋川十字の園」に電話し、彼の安否を問うた。都合よく養子の弘さんが出て「父は今朝一時ごろ心臓発作を起し、手を尽くしたが及ばず、十時に息を引き取りました。お祈りありがとうございました」という返事であった。

「あのなつかしい大野さんに、もう再びこの地上でお会い

できない」と思うと寂しかった。しかし、悲しみはなかった。むしろ「大野さんは一番よい天国に行かれたのだ。さぞ本望だろう。」と大野さんのために喜んだ。

大野さんの生涯は、人間的に見るかぎりでは報いられないものであった。

大野さんは青年時代に求道され、大正十年六月十八日、二十四歳の時、大阪泉尾福音教会で受洗された。同十三年十一月、柘植不知人先生による第四回関西リバイバル聖会が同教会で開催された。大野さんはこの時、柘植先生の聖霊に満ち溢れた説教にふれ、聖霊の感化によって新しくせられ、信仰と聖霊に満たされた聖徒と変えられたのであった。

大野さんは、大阪で大工の棟梁であったが、仕事をまかせた人の失敗で大阪に居れなくなり、北九州に移り住んだのであった。その大野さんが、初めて八幡前田教会の礼拝に出席されたのは、昭和三十三年ごろであった。同じ信仰の流れをくむ前田教会に導かれたのも、神の深い摂理によるものであろう。

大野さんは愛の人であり、同情の人であった。大野さんからはいつも笑顔が絶えなかった。

『愛は寛容であり、愛は情深い。またねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える』（コリント人への第一の手紙十三・四～七）さらに、

『御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制』（ガラテヤ人への手紙五・二十二～二十三）など、数々の御霊の実を、大野さんは主にあって、すべて結んでおられた。

大野さんは、両耳とも難聴であった。左手も不自由であった。このように、二重の障害を持つ身でありながら、自分のことは忘れ、多くの人々を愛し続け、また祈り続けた。

大野さんは、実によく聖書を読まれた。聖書全体が赤線だらけであった。従って、み言葉を克明に暗記しておられた。何章の何節までよく覚えて、すらすらとよどみがなかった。

大野さんはまた、よく伝道された。相手が信者であろうと、未信者であろうとお構いなしで、会う人ごとに聖書の話をした。食事の時も聖書を食卓に置き、食べるのも忘れて語った。私が時々「大野さん、食事の時は聖書を下に置き、食べることに専念して下さい。話は後で聞きます。」というと、彼は

「ハイそうですね。」と言って聖書を下に置くが、三分もたたないうちにまた食卓に置いて語り出すのであった。私は、大野さんの聖書の話や、信仰の体験談など熱心に聞き入り、何回聞いても飽くことがなかった。

大野さんは、大工という特技のゆえに、教会の皆さんから大変重宝がられた。他に頼んでも来てくれないような修理なども、こころよく引き受けて、丁寧に直して下さったものである。私が当時住んでいた神山町の借家なども、玄関の格子戸や、板壁など修理していただいた。これも今では思い出の一つとなった。

大野さんの在幡期間は、僅か六年であったが、その愛のゆえに、前田教会の日曜学校生徒をはじめ、老若男女すべての教会員から愛され、慕われたのであった。

三十九年十二月九日は、大野さんとお別れの日であった。吹田市で就職した弘さんと一緒に暮すことになったのである。八日の夜、私の家でささやかな送別会を催した。集まった人は、三苫静子さん（渡ケ次）、渡瀬美紀子さん（高橋）、それに内海富子さんなどであった。一同、大野さんの愛歌五一三番「天(あめ)に宝つめるものは」を心から讃美し、感謝の祈りをささげ、食事をいただいた。我々は、時のたつのも忘れ、過ぎし六年間の思い出話に花を咲かせ、名残りを惜しんだ。

大野さんが大阪に帰られて、今年は丁度二十年になる。私はその間、大野さんに四回会った。一回目は四十年春、姫路福音教会で開かれた連合聖会であった。私は大野さんをこの聖会に招待し、三日間、集会と寝食を共にした。大変恵まれた、そして楽しい時を過ごした。

余談になるが、この聖会の主講師は、滕村壮七老師であった。老師は私にとって忘れることのできない恩師の一人である。老師は、慈顔をほころばせ、私に親しくお声をかけて下さった。老師とは、この時が最後のお別れになった。翌年九十六歳で召天された。

二回目に大野さんに会ったのは、四十六年四月大阪にいた丸山雪夫兄宅の家庭集会であった。相変らず笑顔が絶えなかったが、頭には白いものがふえていた。私が送別の際贈った、折皮の大形聖書と讃美歌を大事に使用していた。

三回目は四十九年秋、前田教会の改築の時であった。来幡された大野夫妻は、しばらくの間、教会や、私が住んでいた新日鉄平野社宅で過ごされた。

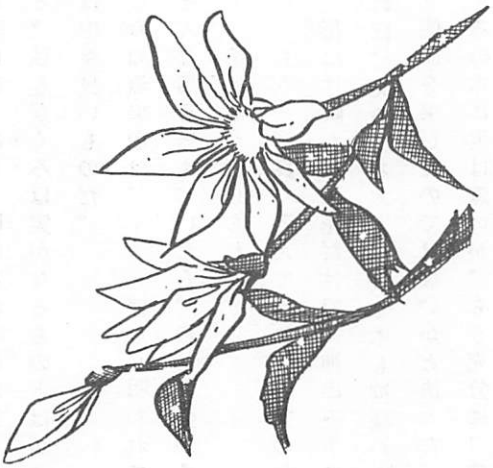
四回目は五十二年七月、家内と関西地方を旅行した際であった。私たちは「十字の園」に夫妻を訪ね、再会を喜び合っ

た。数時間の語らいの後、夫妻をカメラにおさめ、お別れした。思えば、この時が大野さんとの最後の別れであった。

我らが敬愛した大野さんには、信仰の戦いを立派に戦いぬき、永遠の命を獲得されたのである。今や天にある大野さんは、主から栄の冠をかぶせられ、代々の聖徒と共に、感謝と讃美を神の御前に捧げていることであろう。

『主の聖徒の死は、そのみ前において尊い』

（詩篇一一六・十五）



暖かい日、寒い夜

野村末義

「神のなされる事は皆その時にかなって美しい。」

（伝道の書三・十一）

わが家の狭い庭の真中に、一本の木が青々と良く繁っている。余り伸び過ぎて、日当りが悪くなるからと度々枝先を落したりして、或程度は、庭の形もきれいにと思っていた。

ところが、それがざくろの木だと知って驚いた。枝を切り落そうと思い、ふと一つの枝の中間に親指位の丸い玉の様なものを見つけた。

「これは？」と思って高い枝に目を向けて見ると、赤い花が一輪きれいに咲いていた。

それは、花ざくろで、八重咲で花弁のふちは一寸白くて、波打った形であった。

長い間、少しも咲かなかったのに、二、三年前から六月の時期になると咲くようになった。

今年は又、今迄以上に沢山咲いて奇麗で賑やかであった。

「七重八重、花は咲けども山吹の、実の一つだに無きぞ悲しき」との有名な歌があるけど、実がならぬ花だけの木は、

どちらも同じ事である。切角花が咲けば実もある物だと、誰も考える。私もざくろは実がなるものとばかり考えていた。その実は中々良いものだ。

実がならぬ無果樹は、イエス様から咀われて枯れて終った。ふと、そんな事を考えていたら、自分の姿がそれではないかと思って、情けなく感じられた。

しかし、もう一度良く考えて見たら、実のなる木は実がなる事で、花だけ咲く木は花だけで、神のみ手により造られたのであれば、実のなる木も花咲く木も神様から与えられた命で、各々使命を果したのではないかと悟った。

花ざくろの木に実は無いが、もう充分に、神の栄光を表わして使命を全うしたと云える。

今は全部散って終って、何事もなかったかの様に、黙って緑の葉を繁らせている。

花ざくろの花は僅かの間だけど、塀の外を通る人々が「きれいな花が咲いてる・・・・」と上を仰いで見てほめてくれたら、本当に感謝である。

自分も、貴い主から受けている使命に、力一杯咲く事ができれば、実のない木でも、いつかは神様の栄光をさんびし感謝して頂く時が来るであろうと思った。

× × × × ×

十二月頃の或寒い夜の事、強い風が吹き荒れたので、狭い棚の上に置いていたサツキの鉢が、揺られて落ちて終った。朝になって見付けたが、時すでに遅く、鉢も割れて土が流出て根は丸出しであった。幸に枝は折れずに助かったが、寒い冷い冬の事とて、植替えてやりたいが、とても今頃扱う気にはなれなかった。家内も何とか考えていたに違いないけど、何しろ寒い夜は、コタツの中で仕事をする位で、連日の寒さでは勇気も出ない。

「何とか植え替えてやってよ！」と、私が口を出したが、中々実行にはならない。

家内は心の中で、「もう、どうでも良いわ、枯れるなら枯れても好いよ。」と思っていたそうであった。

そのまま半月程過ぎた。その間、何度か家内に話してみたが、憐れにも、サツキはこの寒空に裸になった根をさらけ出したままで、今にも泣き出しそうであった。これをみた私は放置するに忍びず、「よし、下手でも何とか植え替えてやろうかナ。」と思い、新しい土を買ってきた。「明日は何とかしてやるゾ」と思って、その夜はやすんだ。

翌朝目覚めた時に、立派に植替えられたサツキの鉢が、廊

下でキラキラと新しい土に輝いて嬉しそうにおかれていた。家内が寒さも忘れてきれいにしてくれたのであった。「ヤレヤレ、如峯山（サツキの名前）も、おかげで救われたネ。」と私が言うと、家内は「いろいろと手をかけたものを枯らして終って・・・・、やっぱり捨てるわけには行かないからね」何だか、ルカによる福音書十三章の農夫と主人との対話の様な気がしてならない。

この命拾いをした救われたサツキは、私ではないか？度々放り出される様な事しかできない私を、父なる神の前にとりなして下さってる主イエス様の故に、亡ぼされる者が亡ぼされないで、今日迄活かされてきたのである。

もう一度、新しく主に感謝を捧げる事ができたことである。

因みに、その如峯山（サツキ）は、五月末になって、外の鉢よりは少々おくれたけど、可愛いピンクの小花を沢山つけて、楽しませてくれた。やはり忍耐を以て手を入れて得たものは、外の物に倍して嬉しいものである。愛の主は如何であろうかと、小さく弱い私の様な者、十字架にて注ぎ給える愛の故に今日も目を止めて、花咲く時を期待して、とりなしていて下さるのであろう。

〃われらも愛せん、愛なる神を〃　（讃美歌八十七番）

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、み子をおつかわしになった。ここに愛がある。・・・わたしたちも互に愛し合うべきである。」

（ヨハネ第一、四・十）

恵みのあかし

（その一）

花田文子

「我に来るもの我必ず之を捨てじ」

「事々に相働きて益となるを汝等は知れり」

神様は私の様な小さな者をも見捨て給わず、愛なる道を示して、絶えずあわれんで守って頂きました。様々な中を通して大過もなく無事に卒業させて頂きました。本当に感謝でございます。

これからは働かねばなりません。私には負債があります。東京で就職口を探しましたが、なかなかありません。家は卒業と同時に出なければなりません。その頃、横浜に母の親友の方が子供を横専に通学さす為に来ておられましたので、二、三日置いて頂き、横浜で働く事になりました。

この頃は、休みもなく、勤めを大切に早く身軽くなりたいと働きました。丁度この頃でした、東の空の白む頃、三発の礼砲を聞いて親王様の御誕生を知りました。町は皇太子御誕生と祝賀気分が漲っていました。

家では私が横浜にいる事を心配して、早く神戸に帰る様にと言って来ます。神戸にはお兄さん（従兄）がいらっしやるから、兄の近くだと安心と奨めて来ます。二、三ケ月して負債もすっかり終り、神戸の従兄の家に身を寄せました。朝夕、家の手伝いをしながら、日中は就職口を探して歩きました。神戸にある政党の経営する診療所がありました。貧しい人々に低料金で診療をしていました。受信料五銭、お薬代一日分拾二銭、普通の病院では受診料五十銭、お薬代普通薬一日分五十銭でした。私は貧しい人々の心の友となって慰めてさし上げたいと思っていましたので、入所致しました。しかし、入ってみれば、私の仕事は会計が主で、調剤時の受付のような仕事で、今まで努力して身につけた実技は全く使うことはありませんでした。感謝することは、毎日曜日礼拝に出られることでした。神様の事はあまりはっきりわかりませんでしたが、礼拝に出るという平安が心の中にありました。看護婦さん達からはお母チャンの愛称で呼ばれていました。時間外に皆で遊びに行く時は、何日でも私一人でお留守番です。皆が楽しそうに喜々として帰って来るのをたまらなく嬉しく迎えました。

診療所は安価に診療して下さるというので毎日多勢の患者さんがつめかけました。一ケ年余り過ぎた時、中央部と西部に増設することになり、私は中央の楠町六丁目の責任者とし

て行く事になりました。炊事係の小母さんの相談相手から用度まで大層忙しくなりました。選挙があれば演説会にも行かねばなりません。スト前は大変でした。幾百人かの市電の運転手さんと車掌さんを幾隻かの屋船に乗せて淡路島へ連れてゆくから必要な医料品一切を用意する様にと申されて、風邪薬、腹薬、目薬、消毒薬、ホータイ、バンソーコ等々一通りの薬品を出発前に揃えねばなりません。

私はフト考えました。ストは良い事か悪い事か、多くの市民の皆様方の足を奪って市民を困らせ、自分達の給料を上げてもらう。他に方法はないものか？私は何だか悪いことの手助けをしているような気がしてなりません。真実の私の心は乏しい生活をしておられる方達の心の友となり、少しでもその方達のお役に立ちたいと願っていましたが、現実はどうかしらと反省致しました。また近い内に大きなゴム会社もストをするぞ等と聞かされては、胸が痛みました。

その頃一人の看護婦さんが入られました。郷里が近くであった為に話が合って、日曜日家にいらっしゃいと言われるままに行きました。そのお家は普通の住宅で、改革派日本キリスト教会でした。アメリカの宣教師マヤス先生の教会で、伝道集会は神学校の学生さんが交代で御用をされておられました。この教会は家庭的で畳の上に座っての礼拝でした。友達と共によく行きました。この友達も一年余りで牧師先生の御子息と結婚されました。その後も教会へは行きました。夕拝後にはマヤス先生のお車で送っていただきました。先生は流暢な日本語で神様はわたしどもと共にいて下さることをゆっくりした口調でお話になりました。

数年後、この教会の友達のお父さんのお世話で、親戚のクリスチャンとの事で祈りの中に花田との話が進み、宣教師の自宅で挙式致しました。丁度この翌日、京都同志社大学でバックストン先生のお話があり、直に京都に急行してお話を聞きました。その時は通訳の先生が大層わかり易く力にあふれて話していただきました。

四、五日後、旅行を終えて特急さくらで六時間半、博多駅に着きました。何と郷びた駅でしょう。電車の女車掌さんは大きなながま口をぶらさげて髪はぼうぼうと乱れていて、私の目にはほんとうに淋しく、西の果てに来たような心細さがありました。

日曜日が来ました。同居の従業員も一緒に礼拝に参りました。浜町教会は皆座っての教会でした。午前十時礼拝、午後二時祈祷会、午後七時夕拝、日曜日は三回、水曜日午後七時より

伝道集会、火曜日から土曜日迄午前六時半より早天祈祷会。日曜日初めて礼拝に行って驚きました。目の前の霞がすっかりぬぐい取られて、神様が迫って頂いた思いがしました。今まで渇いて礼拝に出して頂きましたが、この様に私の肌身にひしひしと迫っていただいたことは、末だかってありませんでした。嬉しくて集会が待遠しくなりました。二ケ月余りの後、教会のすぐ近くに移らせていただきました。早天祈祷会も火、水、木、金、土と週五回ありました。神様は私の祈りを一つ一つ成就なして下さいました。神様の御臨在に近づく事のできる生活を切に求めておりましたが、今こそその祈りがかなえられて幸の身となして頂きました。この頃、支那事変が起りました。物資は少くなり、平和産業は企業合同が叫ばれはじめました。

衣料品も切符がなくては買えない様になりました。食料品も配給制度になり、経済警察ができて、ヤミの売買をすれば警察へ連行されて品物は没収され、その上に処罰されるのです。

神様のお恵で子供は与えられましたが、オムツやオムツカバーに困りました。従業員や職人さんも徴用や召集で一人減り二人減り、一人もいなくなりました。生活も次第に苦しくなりました。配給を受ける為には二時間も列をつくって並ばなければなりません。子供達も規律正しい生活をしていましたが、次第にくづれはじめました。朝の六時半の祈祷会は二才になると皆連れて行きました。雪の朝など煉炭火鉢の煙の出ている上に五、六人の子供が小さな手をかざして、静かに先生のお話を聞いていました。

戦争は次第に苛烈になりました。配給は一ケ月に四、五日も欠配の日が続くようになりました。防空演習も毎日の様に練習があります。バケツに水を入れて「高所注水はじめ」在郷軍人の号令一下バケツの水を高い所めがけてかけるのです。担架操作等々みんな真剣でした。ゲートルやモンペは夜もそのまま着てやすみ、警戒警報のサイレンが鳴れば、すぐに起きて子供達を抱いて防空壕に入らなければなりません。暑さの為に子供達は泣きます。爆風が入ってはいけないと入口はフトンでかこみ、中でうちわで子供達をあおぎながら「神様戦を止めさせて下さい」と切に祈りました。泣かないで、もうすぐに出られるからねとあやしながら、深夜の警報の解除を待ちました。戦勝の続いている頃はお米の配給がなくともお米の代りにお砂糖や大豆の配給が遅ればせながらもありましたが、転進々々と云って負け戦の色が見えはじめた頃は欠

配が十日廿日と次第に多くなってきました。今夜二時に〇〇部隊が出発しますから〇〇迄国旗を持って見送りに出て下さいと隣組を通して通達がありますと、白い割烹着姿に日の丸の旗をもって、バンザイバンザイと言って送りました。出発される兵隊さん達のお顔は万感胸に秘めて、たとえようのない様でおられました。時には赤ちゃんをおんぶされた奥様が、御主人の列に遅れまいとして小走りについていられるお姿、御心情をお察し致しました。

戦況が思わしくなくなると、転進があちこちに行われました。満洲牡丹江にいました弟も高知県に転進してきました。本土決戦の用意でしょうか、二分されて半数は南方に転進された由でした。集会ももしかするとできなくなるかも知れないという噂が流れました。捕虜を見てお可愛そうといった人が警察に引張られたそうで、決してそんな言葉を言ってはいけないと戒め合いました。B29の空襲は日増しにはげしくなりました。汽車も何日動くかわかりません。欠配は卅日以上になります。燈火管制はきびしく、カーテンのすき間から小さな火がもれていても、××さんお宅から火がもれていますよと外から声がかゝるのです。身も細る思いが致しました。

牧師先生の奥様はお体がお悪くて伏せておられました。冬のある日、牧師館からお使いで呼ばれまして教会のお玄関に参りました。そこには××療養所の院長先生と牧師先生がおいでになり、院長先生のお言葉で奥様にブドー糖の静注をして下さいと申されました。しかし、私は八年近くもした事がありませんので、万一の事があっては・・・とおことわり致しました。先生は方法は知っているでしょう、二〇cc注射器を出されて私に手渡され、私の手つきを御覧になり、全責任を私が持ちますから明日から毎日こちらに注射に来て下さい、消毒はこちらでしておきますからと申されます。牧師先生もお願いしますと申されます。大変な事になりました。翌日から消毒ができましたと声がかけられますとすぐに上り、神様どうか守って下さい、正常にできます様にと祈りの中に終りました。

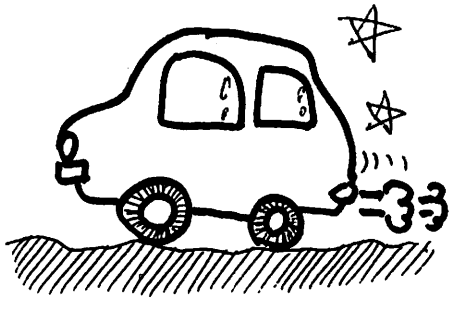
年が明けて一ケ月余りも過ぎた頃でしょうか、手足にむくみがあり、なかなか入りません。奥様は口の中に入れて頂きましょうと申され、お口の中に入れました。翌日からはむくみの上を暫くおさえて血管を出して入るようになりました。この四、五日後の昼頃、早く来て下さいという急な呼声でかけて行きました。奥様は片栗をスプーンで食べさせて頂いていて、急に目を閉じて御返事がなくなったとの事です。学校

へお子様を迎えに行き帰られましたが、容体は変りません。奥様のお耳のそばで、私が「奥様」と大きな声で呼びましたところ、パッチリと目を開かれてニッコリなさいました。

それから、御子様のピアノで愛歌を二曲、近所の信者さんと共に歌いました。歌い終ってから、お子様一人一人に最後のお別れのお言葉をかけられました。牧師先生は四才のお子様を抱いていられました。先生には「我がなす業を信ぜよ、汝今知らず、後之を知るべしですからね」と申されました。その後は常とお変りなく平安でおいでいらっしゃいました。その夜十一時頃お召されになったと承りました。転進という話をあちこちに聞き、戦況の不利を覚え、子供達だけでも四国に疎開させようと思って相談して、汽車の乗車券の入手、疎開先迄の途中の食糧の用意を致しましたが、私の分が一枚どうしても入手できません。一日に幾度となく駅へ行ってもだめです。もう主人はつかれていましたが、今日もう一度駅へ行って下さいと切に祈って送り出しました。夕方やっと買う事ができました。感謝致しました。幾日かかって着くかわかりませんので、食糧を充分持って行かねばなりません。二升五合の御飯を炊き、お酢を入れて全部おにぎりにして、他はオムツと下着類を二つのリュックに入れ四人の子供を連れて、六月十九日午前四時半博多発の上りにやっと乗り込む事ができました。十二時間半身動きもできない列車の中で、やっと尾道に着きました。連絡船は一日三回しかありません。それも警戒警報が出れば船は動きません。旅館をさがしましたが、子供を連れていては止めて下さいません。主人が子供を一人だけ連れて旅館さがしです。暫くして早くおいでと迎えに来ました。ほんとうに嬉しく感謝して宿に入りました。とたんに女中さんのお顔が変りました。あゝしてはいけない、こうしてはいけないとことごとにむずかしいことでした。主人から心付けを多額に包むようにと注意を受けましたので、直に渡しますと、それが良かったのでしょう「坊チャン、おんぶしてお風呂に連れて行ってあげましょう」と言って、銭湯迄案内していただきました。その頃、旅館にはお風呂がない事になっているらしゅうございました。午後十時過ぎやっと床につきました。午前二時前から表がざわめきはじめました。連絡船に乗る人達がならんで順番を待っています。早く並びましょう、第一船に乗れなければ何日になるかわかりませんと云いつゝ子供達を起して列び、第一船に乗る事ができました。今治は港から駅迄遠いので、やっと一台の人力車を雇い、子供達を連れて乗り、荷物は主人が全部持って駅迄走

りました。この汽車に乗らなければ、次は何日来るかわかりませんとの事です。一生懸命でした。発車間ぎわの汽車に乗り、夕方実家につきました。

神様は大なるみ手をもって何日でも支えていただきます。道なき所にも道を作り、母親がみどり子をいつくしむように守り、いつくしんでいただきました。只管感謝を致します。



（その二）

「汝が我に求むるところは、我必ず之をなさん」

「おそくあらば待つべし、必ずとゞこおりはせじ」

実家に着いてほっとした時、昨夜福岡が大空襲を受けて焼けてしまった事を知りました。多分家も焼けてしまったのでしょう。あの時一枚の切符が手に入っていなかったなら、四人もの多勢の子供を連れてどうしていたでしょう。神様は私どものために逃るべき道をそなえて導き出して頂きました。只々主のみ業を拝して感謝致しました。

みかん畑ばかりの田舎には、米を作る田は全くありません。米の配給が少しずつある位では、子供達を満足させる事はできません。子供達のために物々交換をして凌ぎました。空襲警報が出ると、夏の暑い日に綿入れのネンネコに小さな子供をおんぶして防空ズキンをかぶり、家の戸を開放して長い笹箒を両手でしっかりと握り、焼夷弾が落ちて来ると掃出すかまえをして海と空を見つめて立っていました。老人と子供達は共同の防空壕の中に入れていたゞいて、解除のサイレンを待ちました。本土上陸という噂が流れました。米軍が上陸する様になれば皆殺しにされるのだから、九州に生れたあなたは九

州で死に、私は子供達と一緒に四国で死にますと、疎開を決めた時死場所も決めていました。私は体の調子が少し悪くなり、一日に幾度となく貧血を起して倒れます。福岡よりも食糧も手に入り易く、両親も揃っていて何くれとなく気をつけて頂き、警戒警報を時々受ける位で生活はずっと楽になりました。出征兵士の戦死の報があちこちに報じられるようになりました。しかし、日本の国が負ける事等決してないと信じていました。八月十四日のラジオで「明日十五日午後三時重大なニュースがありますから聞いて下さい」とのことでした。翌日三時ラジオの前で待ちました。天皇陛下の玉音との知らせの後、初めて聞く天皇のお言葉でした。しかし、ラジオが雑音ではっきり聞き取れませんが、どうやら日本が敗けたような様子です。私の耳がどうかしていると思い、近所の方を呼び集めてもう一度と思った時はもう終っていました。他にも聞いている方がいらっしゃる筈と思い、家で話していますと近所の方達も半信半疑であちこちで争うような様子です。頭の中が混乱して、どんなにして良いかわかりません。日本は決して負けてはいない、そんな筈はない、でもラジオが・・・。一日二日はこのような状態でした。日数が過ぎるにしたがって次第に静かになりました。

今度は、米軍が上陸すればどんなひどい目にあわされるかわからないから、女と子供達は山の中へ逃げなければならないとおそろしい噂がありました。何事にも手がつかない数日が過ぎました。世の中は少しずつ落着いたように思えました。終戦より十日後の夜も更けて弟がぽつりと帰って来ました。命あって帰った事を喜び感謝していると、弟は叱って「静かにしなさい。多くの友が戦死している中に僕は何の働きもなく、どの顔をもって帰って来られようか。昼間は帰って来られないので、途中時間をつぶして夜闇にまぎれて帰った来たのだ。」と申します。その翌日からは雨戸を閉めて寝たきり、幾月か長い間近所の方達とも顔を合わす事はありませんでした。

翌年六月疎開して丁度満一ケ年後、福岡へ帰って参りました。町はすっかり焼野原となっていました。西公園の店も湊町の家も魚町も何も無く、地上のものゝむなしさがひしひしと身にしみました。住む家だけは与えられていました。戦時中空家にしていては空襲を受けた時に困るから住んで下さいと頼れて住んで居りまして、ほんとうに感謝致しました。食糧はありません。苦しい日々ではありましたが、空襲はなく、夜は心配なく一晩中ぐっすりと眠る事ができるようになりま

して、感謝でございます。学校へ行く子供達はみんな裸足です。お洗濯するたらいさえ、焼けた家にはないのです。お釜の配給があると云えば、クジ引きで土で焼いた土釜が運のよい人に当るのです。想像もした事のない生活でしたが、一族皆揃って暮せる事はほんとうに感謝でございました。その翌年、或る会社の事務所が必要だから応援するから事務所を建設してほしいとの依頼を受けて、廿二年五月着工、翌廿三年一月竣工致しました。焼野原の中に建ちました。家ができますと、人の出入が多くなりました。事業も幾種かはじめました。社員も次第に増えてきました。まだ始めたばかりで基礎の定らぬ時、主人が倒れて入院致しました。暫くして手術をせねばならなくなりましたが、院長先生は横浜の生体解剖の軍事裁判に証人としてお立ちになる事になり、幾週間かかゝり入院が長期になりました。設立したばかりの会社はどうなるのでしょう。退院の次には会社が思わしくない様子でした。神様は様々な方法をもって鞭打たれました。子供も病気になりました。「心をつくし精神をつくし心ばせをつくして主なる汝の神をあがむべし」心のそこから祈りました。少し建ち直るかと思っていると、又欺されて目の前が真暗になりました。神様は様々な方法をもってわたし達一家を鞭打たれました。あしたに夕べに祈りました。神様私共だけでしたら如何様とも忍びます。でも今はあなたから託された五人の子供があります。神様助けて下さい。荒野で多くの民を養われた神様・・・・。主人は一度人を信ずると、全く疑わないのです。或る日母が来まして「あなた達二人は、人が少し都合良い事を云って来ると、神様のお使い位に思って信じるからだまされるのだ。少し位は人を疑ってみなさい」と心配の上でのお言葉を受けました。

牧師先生は、毎朝心を注ぎ出して六ケ月間祈ってごらんなさい。神様は何かを表わして下さるからと申されました。それからは毎日毎日切に祈りました。生活はいよいよ苦しくなりました。二月七日突然に大出血あり、病院に参りました。手当をして頂きましたが、なかなか治りません。病院では体に栄養をつけるより方法がないとの事でした。仕方がないので、止血剤の注射と造血剤の注射薬を買って自分でしていました。三月廿四日牧師先生に訪問して頂き、手を置いて祈って頂きました。それっきり週一回の大出血は止りました。神様の大なる御愛を感謝致しました。体は次第に衰弱し、歩行も苦しくなりました。「臨在はものを癒し、ものを生かす。がんばれ。」と主人にはげまされて、主人の腕に支えられて

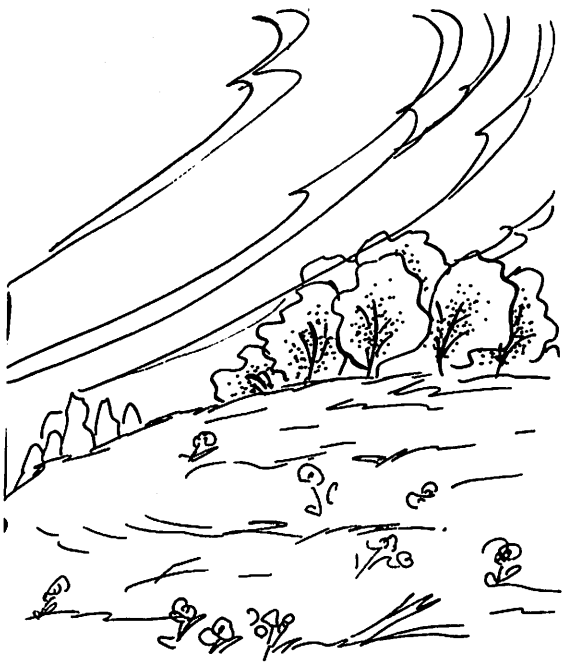
礼拝に引出して頂きました。主のかぎりない御憐みによりまして、六月全く癒されました。ほんとうに感謝でございます。神様は事業を取り、健康をとりあげて迫られました。今にして思えば、神様は私共を愛し、ゆるがぬ神様の御愛の中に止め置くために様々な中を通して頂きました。大きな嵐の中、暗黒で先も見えず寒さにふるえ、降る雨の中を一人傘もなくぬれながら歩むような日々、「目をあげて高きを見よや彼処にあるものは誰が造りしかを思え」「今はありて明日炉に投げ入られる野の花をも神はかくよそおい給へば、まして汝等をや」状態を見ては弱る心をみことばによって力づけて頂きました。

神様は手ほどの雲を見せて頂きました。「今度は欺されませんようにしっかりして下さい」と申しますと、主人は「欺したんではない。欺されたのだから後味は悪くない」「でもこんなことをくり返していたら生涯これで終ってしまいます。子供達がいますから」祈って希望を持ちながら心のすみではいくらかの心配がありました。神様はわたしたちに少しずつ光を与えていたゞきました。

仕事が成長しはじめますと私が倒れました。発熱して四〇度を少々上下する状態です。二週間続きました。自分ではうつうつしているので、苦しさはなく夢のような状態でした。お医者様は「高熱が二週間も続いているので明日は伝染病院へ入院して頂きます」と言って帰られました。私は伝染病院と聞いただけに驚きました。神様そんな病院へはいやです。早く熱を取り去って下さい。神様いやです。と切に祈りました。翌朝十時頃先生がおいでになりました。常の日は往診は午後ですのに、入院の手続の事をお考えになって早くいらっして下さったのでしょう。いつものように体温計をお取りになりました。「三十七度ですね。下りましたからもう入院はしなくてよろしいですよ。」神様ありがとうございます。天にも上る心地して感謝致しました。この様な小さな者の祈りも瞬時にしてかなえて頂きました。嬉しさにふるえました。未だ私が病床にいる頃、家主さんが家を空けて下さいと言って来られました。様々な理由を持って四、五日置きに来られます。この家は現在の家主さんが朝鮮におられる戦時中に、家を戦火から守る為に入ってほしいとの約束で、借家料もきめて住んでいたのでした。そのお母様も二年程前召され、お姉様（牧師様の奥様）も召されました。そして御当主様に奥様が来られました。地続きに四、五戸の貸家も持って土地もたくさんお持ちです。生活は苦しく、私はやっと歩ける程度でした。神様

助けて下さい。戦災の地に家等ありません。「なくてはならぬものは天の父が知る。」「天と地とその中に満るものは皆我がものなり」神様みことばを信じさせて下さい。あなたより託された子供達が雨露をしのぐ所がいります。一日一日が針のむしろの上でした。神様は切なる祈りをあわれんで下さいました。空け渡しの請求が三日延び五日延び三、四月後には来られなくなりました。神様は弱い私共を御愛の中に覚えて、ことごとに貴いみわざをもって守って頂きました。

かぎりない御愛、感謝でございます。



（その三）

「汝我を選ばず、我汝等をえらべり」

「なんぢ我が愛におれ」

神様は私共を愛していただきました。少しずつ社員も多くなり、仕事も忙しくなりましたが、車の事故が続きました。子供をはねて病院にかつぎ込みました。大きな鉄材を積んだ車が落ちました。荷車を引いていたおぢいさんをはねて病院に入れました。毎日祈っていましたが、おそろしい様に次から次へと重りました。只今のように保険制度もなく、遠方迄もお見舞に交渉に、弁償に車の修理にかけまわらなければなりませんでした。神様は愛する者を鞭打つとおおせられますが、誠にわたしどもは愛せられていたのです。道端の草の様に踏まれては芽を出し、又踏みつけられます。経営は次第に苦しくなりました。身も心も疲れはてゝ、私は発熱し倒れました。三ケ月位して体も快復に向いましたが、足が立ちません。神様歩ませて下さいと祈りつゝ、赤坊の様に柱や襖に支えられて、之も旬日にして一人歩きをさせて頂き感謝でございました。この頃には経営はいよいよ苦しくなり、最も苦しい試練が次第に迫って来ました。それは水の底を歩むような

一日一日でした。病後の体に鞭打って私も働かねばなりません。子供達をかゝえて勤めに出る事もできません。何か家でできる仕事をと祈り求めていました。不思議に道が開かれ始めました。神様は良き友を次から次へと与えて頂きました。又材料にデザインに販路迄も与えて救っていただきました。「我に来るもの必ず之を捨てじ」神様はこの度も愛の中に包み、あわれみ守って頂きました。感謝を表わす言葉はありません。只管感泣致しました。睡眠時間三時間半、神様は健康も支え守って頂きました。子供達もできる事は力を合せて手伝ってくれました。このような日々を神様は憐んで小さな雲を見させて頂きました。

その雲の過ぎ去らない様に一層祈りました。しかし、願いどうりにはなりません。様々な渦中に言葉にも表わすことのできない事が次から次と迫って来ます。苦しい日は過ぎ去らずして上から上に重なってきます。暑い夏も秋も冬も又春も過ぎてゆきました。それは息苦しい日々でした。長い忍の日の後、苦しい中に一筋の光を与えていたゞき、見あげて感謝致しました。そして或る日、俄然、大きなみ業をなして下さいました。お役所始って以来かつてない大なるみ業を現実になして頂きました。主人は書類を前に置いて「之を見よ。神様は今だかつてなかったみ業を私共の為になして下さった。さあ感謝しよう。」私は驚きと嬉しさに聖名をほめ感泣致しました。

神様は私共が手ばなしで喜んでいることをお許しにはなられませんでした。主人は前から体が悪かったらしく外出先で吐血をし、子供達も心配して入院致しました。薬で治療する予定でしたが、一ケ月半位して手術をすゝめられて之をきらい、無理に退院致しました。療養中に又も私共の前に大きな山が聳えていました。正しい事の為にはどうしても戦わねばならない。「二人して祈ろう。神様はあの様な大なるみ業をなして下さったのだから、二人して心を合せて祈るならば、きっとかなえて下さる。」朝も晩も祈り抜こう。先生からは「基みな破れたらんには、義しきもの何をなしえんや」とのみことばをいたゞき、そのみことばを壁に貼りつけて、一生懸命祈りました。それは張りつめた弓の様に切に切に祈りました。あの大なるみ業を現実に私共になしていたゞいた神様、この大きな山も海に移して下さる事を信じて祈り続けました。「祈りは必ずきかれる。おそくあらば待つべし、必ずやとどこおりはせじ」みことばを信じて祈り続けました。この間、子供達にも一人一人良い嫁を与えられ、楽しい家庭を営ませ

ていたゞき、又可愛い孫達も多勢託せられ、成長させて頂いています。ほんとうに感謝でございます。山小屋の様な小さい店も神様は憐んでいたゞきました。たどたどしい歩みでございましたが、祈りの日々が過ぎました。営業も月毎に年毎に祝されてきました。そして年中礼拝をさせて頂く事ができます。神様のみことばの成就される事が、地上で受ける身の幸をたとえようもなく有難く感謝致しました。

「天が地よりも高い様に、私の思いはあなた方の思いよりもはるかに高い」とおおせられます。片方では主の御祝福を受けて感謝し、片方では目前の大山を海に移していたゞく為に祈り続けました。身も心もつくして祈りました。火曜会の日、突然に主人が教会で倒れて連れて帰りました。その夜大吐血と下血をして、入院はいやと言うのを無理に入院させましたが、手当の方法もなく、三日目昏睡に入りながら同じ言葉を二十分位ずつ語り、ちょっと待て……

どう思うや……

みえて来た……

大きな声で、

お父さん……

もう来た……

小さな声で、

はげめよ……

最後はかすかに聞える位の言葉を残し、主のみ手に引かれてみ国に帰ってまいりました。残された私共は祈りました。神様の御憐みによりまして、道を開いてその山を少しずつ移して頂きました。

「人にはあたわぬ所なり、されど神に於てあたわざることなし」とお仰せ給う主をあがめて感謝を致します。

神様は限りない御愛の中に包み、いとおしんで下さいます。この世は悩み多しとお仰せられます。様々の中を通して、神様にあがなわれた子供にふさわしい歩みをなさせん為に、昼も夜も守っていて下さいます。一抹の淋しさに会う時も、主は「我汝と共に行かん、我、汝をして安からしめん」とのみことばを以て、私を愛し温いみことばに包んで御愛の眠に入れて頂きます。何ともったいない平安の日々でございましょう。時々刻々が感謝でございます。雨が降れば恵の雨、お日様が照れば恵の光、一日一日が恩寵そのものでございます。礼拝に引出して頂き、火曜会にはべらせて頂き、地上に於てこのような幸の身分となして頂いた事を心から感謝致します。

「見ゆるものはしばらくにして見えないものは永遠につゞく」とお仰せ給う主に、誠心からお仕えして行きたいと願っています。

（その四）

「おそるるなかれ、たゞ信ぜよ、我はエホバにして汝を癒す神なればなり」

神癒について、私は浜町教会に参りまして、神様が病気をいやして下さることを初めて知りました。これまでは只漠然と癒して下さいとは祈りましたが、それは建前で、心から信じての祈りではありませんでした。不遜きわまりない私でした。しかし、浜町教会へ参りまして、神様は生きて今も私共と共にいて下さる。その昔、多くの病人を癒して下さった主御自身が、今も現実に私共の祈りに応えて癒して下さる事を知りました。育児においても何日でも祈りなさい。授乳についても祈りを呑ませなさい。と承りました。託された子供達が神と人とに愛せられます様にと祈りました。主の御愛な守られて、五人の子供はお医者様を知らずに育ちました。はしかもお祈りして頂いて数日にして癒され、百日咳も神様の御憐みにより二週間足らずで癒され、お医者様は知らずに、神様の御愛のみ手の中に守られて育ちました。冬の寒い日等咳が出ますと「僕どうしてかな、咳が出るよ」と聞いてきます。風邪を引いて、自分は病気と言うことを知りません。「隣りの教会へ行ってお祈りしていただきなさい」と言って行かせますと、先生に頭に手を置いて祈って頂けば咳がよくなると信じています。生れてからの信仰でした。子供達は皆神様の御愛の中に健康に恵まれまして育ちました。

私は幾度も倒れました。ある日腰をかがめたはずみにギックリ腰になりまして、動けません。家で電気治療をしましたが、歩行さえ苦しい状態でした。　治療院へ参りまして、野一色と西式の両方の治療を受けましたが、何の効果もありません。マッサージに、整体にと苦しいばかりです。大家族をかゝえながら家事が全くできません。どうにかして電車に乗って教会に行きたいと思って、電停迄やっとの思いで出かけ、電車につかまりましたが、段がある為に足が上りません。助けられてやっと乗り、座席にかけて大濠で下る時も苦しみました。歩くにも何か支えられるもの、垣根や塀をつたって牧師館に参りました。先生は、ではお祈り致しましょうとおっしゃって頂いて、お手を頭に置いてお祈り下さいました。そして暫くの間、先生とお話をしておりました。三、四十分も過ぎた頃でしょうか、ありがとうございました失礼させて頂きますと言って苦しい腰を上げて立とうと致しました。あら不思議、痛みが全くありません。すっーと立ち上がる事がで

きます。先生ありがとうございます。今全く癒されました。一週間余り苦しんでいましたものが、瞬時にして癒して頂いて、嬉しくて心から感謝致しました。お玄関も門の石段も安々と下りられます。三十分位前は塀をつたってそろそろと歩いて参りましたが、只今はすらすらと何の障りもなく歩けます。夢のようです。神様ありがとうございます。嬉しゅうございます。感謝致します。昔も今も変り給わぬ主御自身のみ業を拝し、よみがえりの主をあがめて、心から感謝致しました。

私は妊娠致しまして後期に入りますと、狭心症の発作が時々ありました。ある日、市場に行く途中、急に気分が悪くなり、目の前が暗くなり、そのまゝ電柱にもたれたまゝ失神してしまいました。丁度、洋服屋さんの前でした。そのお店の年配の奥様がコップにお水を入れて来られて「もようしておられるのではないですか。お水を召し上れ。」とのお言葉でほっと目覚め、電柱の下にくずれているのに驚き、お水をいただき、丁度隣りがタクシーでしたので乗せて頂いて家に帰りました。祈りながら家に入り、誰にも気付かれない様に床に就きました。胸の痛みがおさまりますと、常と変りなく働けます。又ある時は、電話を受けていて気分が悪くなり、そのまま倒れてしまったり、又か又かと言われるような有様でした。こんな事では満足にお産ができるかしらと心配致しました。無事にお産ができます様に、切に祈りました。神様は憐んで下さいました。皆様のお祈りの内に正規の時間通りお産を終らせて頂きました。感謝でございます。次の妊娠もその次もこの症状は続きました。戦争が激しくなり、食糧事情が悪くなるほど症状はひどくなりました。最後の妊娠八、九ケ月頃には、一日に二回も三回も失神することがありました。母は私を肩にかけて部屋に連れて行き寝せてくれました。これで無事に子供が産めるかしらと、母は心配しておりました。

しかし、そのお産は一番軽く終り、感謝でございました。神様は信ずる者をして恥しめ給わず、常に変らない御愛をもって包んで頂きました。狭心症のものが、五人の子供を産ませ託して頂きました事は、神様の御憐みでございます。「人にはあたわぬ処なり、されど神においてあたわざる事なし」とお仰せ給う神様が、乏しい生活の中に、しかも弱い肉体のものに多くの子供を託して頂き、心から感謝を致しました。

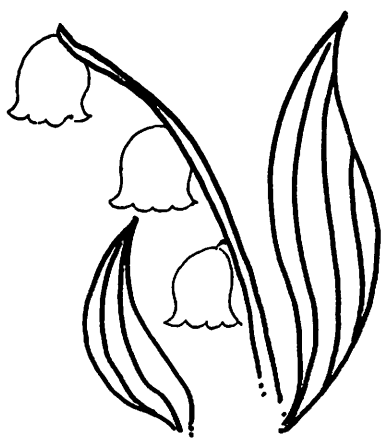
先にもお証し致しました大出血の時も、二月始めから毎週の大出血に身も心も弱りはてていました。お医者様からは見離された状態の時、三月下旬牧師先生が訪問して下さり、手を置いて祈って頂きました。その昔、血ろうを患った女を癒された様に、神様はこの様な者にも貴いみ業を表わしていただきました。お祈りをしていただいた後は、週一回のそれはすっかり癒されました。神様は私のような小さな、移度も同じ悔改めを重ねてみ旨をいためる愚かな女の祈りにも、瞬時にしてみ業を拝さしめていただきました。感謝の言葉もありません。その後三ケ月、丁度六月中旬には全く癒されました。聖名をあがめ、御栄を帰し上げ奉ります。私は神様に愛されていることを思い、只管感謝致しています。

ある時は東京のお客様がお帰りの時、板付空港迄お見送りに参りましての帰り道、私の車が右折する為一時停止していましたところ、直進して来たライトバンが正面衝突しました。病院へと申されましたが、何事もないからと言ってそのまま帰りました。二、三日後、目まいがして見えるもの全てが回ります。目を閉じると体が奈落の底に落ちてゆくようです。嘔吐を催し、苦しみました。その頃狭心症の治療中だったので、すぐに入院致しました。衝突の時、前の席で胸を衝っていたのが出てきたようでした。神様はこの時も守って頂きました。もし先方の車が大型車であったなら、小さなタクシー位どうなっていたかわかりません。神様は瞳を守る瞼の様に守っていて下さいます。「我限りなき愛をもって汝を愛せり、故に我絶えず汝を恵むなり」二ケ月半の入院中も順調に快復し、恵の中に癒され感謝でございます。

私は妊娠の後期になりまして、低血圧と狭心症を併発して、度々発作に苦しみました。分娩後も続きましたので、通院治療を受けておりました。そのお薬を満一ケ年飲み続けておりました。その頃になりますと、食事を食べたのか否か自分自身でわからなくなりました。御飯の減り具合、お味噌汁の量等を見て食事を取ったか否かを知るのです。ふと考えました。私は脳柔化病を起しているのではないかしら、坐ってよくよ

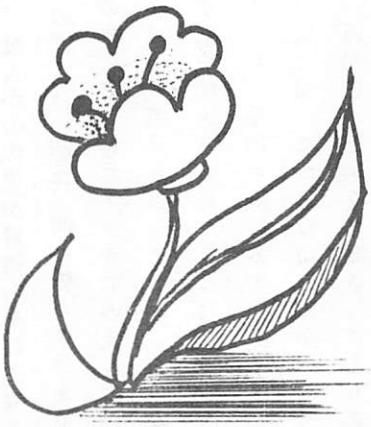
く考えました。神様どうしてもわかりません。わたしは食事がおいしくない。長い間お薬を飲んでいるので、胃を悪くしているのではないかしら。前から胃腸は丈夫で消化器の病いを知りませんでした。一年以上の服薬で胃腸を悪くしていたのでしょうか。今日かぎり服薬を止めよう。食事のおいしさを忘れていました。今日限りお薬を止めよう、その事に気付きそれきり止めました。それから三日目空腹を覚えました。お薬がわたしの胃を痛めていたのでした。神様ありがとうございます。食慾が出てまいりました。ほんとうに感謝致します。これからはお薬は飲まない事に致します。それきり通院もお薬も止め、体もすっかり元気にして頂きました。これからはお薬は決して飲みませんと自分にも言いきかせ、再びこの様な事をしない様にと神様のみ前にも感謝し、皆様の前にも言い表して自分の信仰と行いを固うしたいと願いました。嬉しさと感謝と幸福に満されました。

しかし、時が過ぎ年を重ねていると、過ぐる日あのように迄愛しいつくしんで頂き感謝していた私が、人様の前にお証し迄もした私が、お薬を口にしているのです。何という恥知らずの放蕩娘でしょう。それは春雨のけむる日、小さな板橋を通っている時、少々急いでいたせいもあって思いっきり後頭部を打ち脳震蕩を起しましたが、すぐに気を取りもどして帰りました。しかし、頭の異常の痛さで骨にヒビが入っているかもしれないと思って、病院にレントゲンを撮って頂く為に参りました。骨には何の異常もないので、暫く静かにしていれば治るでしょうとの事で待ちましたが、異常な痛さは変りません。又、受診致しましたが変りなしとの事で帰りました。以前私はお薬は飲みませんと申し上げていたのに、どうしょう、又お薬を飲んでしまった。自責の念に苦しみました。何としても頭が痛みます。尋常の痛さではありません。その数日後、日曜日礼拝に行くべくお風呂に入りました。湯につかっていますと頭がぼっーとかすみます。こうしていては裏の河野のおばあさんのようにお風呂で死んでしまう、早く出なければと思っている内に何もわからなくなりました。四月中旬でした。何事もはっきり承知して話せ



る様になったのは、七月初旬でした。神様の御憐みと多くの皆様のお祈りにこたえられて、地上に置いていただける身となしていただき感謝にふるえております。神様は、体の痛みで苦しい日々は、私を夢の中に置いて痛みを覚えさせない様に、愛のみ手に支えて過させて頂きました。苦しそうであった様を今にして聞き、神様の限りない御愛を一層覚えて感謝致します。肉親達も幾度か来てくれた様ですが、全く知りません。「姉さん、あなたは言葉の受け答えをしていたのに」と今では申しておりますが、初耳です。CTの検査の結果、クモ膜下出血だった様でございます。自分自身がはっきりわかる様になった時、私はこのように元気なのにどうして入院していなければならないのか不思議に思い、先生にお聞き致しました。「先生退院させて下さい。こんなに元気なのに」と申し上げますと、先生は「あなたは歩けないのに退院ができるものか」と申されました。「まあ先生、わたし歩けますよ。」「それなら歩いてごらん。」「先生見ていて下さい。」私は体も頭も何処もわるくないと思っていましたので、ベットから足を下に下してベットにもたれるようにして降りました。どうでしょう。私は足がなえて床にくずれてしまいました。「それごらん」「先生申し訳ございません。ごめんなさい。」神様は痛みもすっかりぬぐい去って頭の中の快復を待たせて頂いていたのでした。自分自身ではどこも悪くないのに、どうして入院していなければならないのかしらと不思議に思う程に、気分的にはすっかり良くなっていました。神様ありがとうございます。同室の方達は皆食事制限を受けておられるのに、私は何を頂いても良いのです。他の方達が羨しがられています。足を強くして歩ませて下さい。そして早く退院する事ができます様にと祈りました。歩行器に助けられて歩かせて頂き、次第に手摺りに変り、一人歩きができるようになりました。殊に嬉しかった事は、先生や教会の方々が次から次へとお見舞い下さり、心からなるお祈りをして頂きました。本当に力づけられ、きっと神様が癒して下さると信じさせて頂きました。八月のある日、先生は私の血液中の免疫性が成人の三分の一になっているので何の菌でもすぐに入るから決して風邪を引かぬ様に、風邪を引けばすぐに肺炎を起して死ぬから、又ほこりのある所へは近寄らない様に、血液を九州大学に送って詳しく検査しますから、このような病気は今日まで例がごくわずかで治療法も不明なのだと申されました。九大病院へ幾度血液を送っても検査ができません。三ケ月経て九大病院の先生が血液を取って直に帰られました。

その結果、人血より造られた点滴を二本宛三日間受けました。八ケ月間神様は種々の中を通して黄泉の中から引上げて下さいました。両方の足はしびれておりましたが、婦長さんは、「あなたが生死をさまよっている時、強いお薬を飲んだので、その副作用かもしれないね、と申されました。今まで知らなかった三ケ月近くの間、神様は御愛の中に包み、苦しさも寒さもなく、天国の御愛の中に眠らせていただきました。何と幸いな事でございましょう。感謝でございます。廊下を東西一回二回階段の上り下り、そして大濠公園を一廻りします。そして朝食後と夕方は室のみんなで讃美歌の練習をする迄に癒して頂きました。一室六人もいますといろいろな事があります時に、私どもの室は皆同じ心に温かく結ばれて楽しい感謝の日々でございました。八ケ月目の十一月終り感謝の中に待ちに待った退院の日が参りました。神様ありがとうございます。お恵によって地上の営みをさせて頂きます。只々感謝でございます。当然み国に入れられようとしていた私を、神様の御憐みと先生はじめ教会の皆様方の熱いお祈りにこたえられて、再び地上に置いて頂きました。感謝の極みでございます。三ケ月毎に、三日間の点滴を受けに通っていました。一ケ年半続きました。今年四月礼拝後お祈りをして頂きました。「人にはあたわぬ所なり、されど神においてあたわぬ事なし」とのみことばをいただきました。その時、私の心の中にひらめきました。私の病気は天国へ行く迄、三ケ月に三日間この点滴を受けねばならないのですかとお医者様に聞いても、そうだとも否とも申されません。治療法もわからない病気なのに先生もおわかりになる筈はないのだった。よみがえりの主が癒して下さる。それからの祈りは真剣になりました。そして一ケ月二〇〇位宛下っていた指数が一ケ月八しか下りません。その次の月もその次の月も五〇上っていました。神様は昔も今も変り給うことのない。神様只管感謝を致します。三ケ月毎に施行する点滴が七ケ月余り受けることもなく、元気に過させていただいています。時々刻々が感謝でございます。みことばを一つ一つ心に抱いてゆるされる限り、感謝をもってお従い致したいと存じます。



（その五）

「人にはあたわぬ処なり、されど神に於てはしからず」

私の一人の子供が学校を卒業すると、すぐに京都のある会社に就職致しまして、社長さんを少し存じあげておりましたので、社長さん宅に置いていただいておりました。入社して二年位経ていた頃でしょうか、社長さんより電話がありまして、子供が腹痛で県立病院では開腹手術をせねばならないというので、今一度市内の有名病院に受診したが、こちらも同じ診療なので、同じ手術を受けるならば福岡に帰って手術をしたいというので、今日零時の特急に乗せて帰しました。もう一週間近くも食事を摂取していないので駅まで迎えに来てほしいとの事でした。突然の電話の事で驚きました。そして切に祈りました。今日迄病気にかゝる事もなく過させて頂き感謝致します。只今汽車で帰って来ます。この度もどうぞ憐れんで下さいと切に祈りました。汽車から降りる姿を見て驚きました。靴もはく事ができず、草履ばきで何も持たず、靴を二本の指に引掛けてフラフラして歩いています。何か口に入れるとお腹が痛むので、何も口に入れられないと言うのです。九大病院への紹介状を持っていましたので、翌日すぐに九大に診察に参りました。幾人かの先生が胃透しをして見ていただきました。先生方の御話合いの後、明日胃カメラを飲んでいただきましょうとの事で、翌日カメラを飲みました。この頃は今日のようにではなく、随分苦しみました。その頃は現像がこちらにはできず東京に送っておりました。一週間かかりました。皆で祈りました。手術を受ける事のない様に願くは全く癒されん事を、家に帰ってからは毎日少量のオモユを飲んでおりました。一週間後、結果をお聞きしに上りました。先生は写真を前に示されて「どこも悪い所はないので、何でも食べたいものを食べなさい。」と申されました。私は驚いて嬉しく夢のようで涙がこぼれました。神様感謝致します。子供は「先生カツでもテキでも食べていいですか。」「何でもよいよ。好きなものを。」子供は二週間余り食事らしいものを食べていません。体力がなく弱っておりましたのに、先生のお言葉を聞いて急に生き返った様に声に力が出て、がかがやきました。先生のお許しを受けて家へ帰る迄待たれません。すぐに九大内の恵愛団食堂に入り、好きな肉をパクパク食べています。今先までオモユで体も弱りきって見るからにぐったりしていたものが、今は目をかがやかせておいしそうに食べています。神様ありがとうございます。昔も今も

変り給うことのない主御自身をあがめて感謝致します。嬉し涙があふれました。おいしそうに肉を食べながら「明日は京都へ帰る」と申します。二週間余りもオモユで過していて弱っているから、せめて一週間位体を造ってから帰る様にとすすめましたが、今は忙しい時だから休んではいられないと言って、翌日一日休養して、次の日元気にニコニコ喜んで帰ってゆきました。神様ありがとうございます。手術を受けないでよいばかりか、全く癒して頂きました。只管感謝を致します。京都の二大病院で同じ様に手術をしなければならない。それもすぐにと診断を受けた子供が瞬時にして癒していただきました。オモユを少しずつ飲んでいたものが、肉をおいしいと言って頂きます。神様のみ業は驚くばかりです。主は我がなす業によって信ぜよと申されます。さわらなければ、見なければ、信じられない様な愚かな私でございますが、アベルの信仰にまで引上げて頂きたいと願うものでございます。ほんとうに感謝致します。振返ってみますと、毎日の歩みの中に数かぎりない御愛を受けてまいりました。汝の体は汝のものにあらずして、貴い代価をもって買取った、わたしのものだと仰せ給う主が、この後も御手の中ににぎりしめていて下さる事を信じ、みことばにお従いして行きたいと存じます。

パウロの伝道旅行

古野　とみ子

――旅行用品――

○ 福音

「しかし、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。」（コリント人①一・二十三）

「福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に、福音にあずかるためである。」（コリント人①九・二十三）

○ 衣服

「あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに、心を向けてはならない。」（ローマ人十三・十四）

「夜はふけ、日が近づいている。それだからわたしたちはやみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。」（ローマ人十三・十二）

○ 飲み物と食物

みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩は、キリストにほかならない。」（コリント人①十・四）

「もしあなたがたが、不信者のだれかに招かれて、そこに行こうと思う場合、自分の前に出される物は、なんでもいちいち良心に問うことをしないで食べるがよい。」（コリント人①十・二十七）

「種まく人に、種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。」（コリント人②九・十）

――宿泊施設――

○ ユースホステル

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。」（コリント人②五・一）

「しかしわたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。」（ピリピ人三・二十）

――交通――

○歩き方

「あなたがたは、以前はやみであったが、今は主にあって光となっている。光の子らしく歩きなさい。」

（エペソ人五・八）

「ただ各自は、主から賜わった分に応じ、また神に召されたままの状態にしたがって歩むべきである。」

（コリント人①七・十七）

○走り方

「――わたしたちの参加すべき競争を耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ走ろうではないか――」

（ヘブル人十二・一～二）

「目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」

（ピリピ人三・十四）

――費用――

「そこでわたしは、あなたがたの魂のためには大いに喜んで費用を使い、またわたし自身をも使いつくそう。」

（コリント人②十二・十五）

――旅行記――

聖書の中の人物で、私が一番興味を覚えたのが、パウロ（ラテン語で小さい）でした。それもあのすばらしい神様の福音と伝道旅行。私はいつのまにか彼の手紙を夢中になって読んだ。そして小さな夢ながら、私もいつかは伝道旅行をしたいと祈りながら、地図を書いたり、訪ねたい人々の名前を書いたり、手紙で近況などをおしえてもらったりした。だけど、貯えはあっても暇のないサラリーマン生活。近所にいる友達の家でさえも近づけないそんな有様でした。ところが、神様はそんな私を憐んで、ときはなした生活に導いて下さった。初めはとまどった。だが、導きに従って集会にはげみ、祈りながら友達の家をめぐり歩いた。そして神様の愛の中にいる生活のすばらしさを味わい知った。でもそれが神様の御手であるのかどうか、わからなくなった。（愛の中につかりすぎて、ねむりこける様になったからである。）私は、他の道を走り回って捜した。しかし、自分の力ではどうしても道が開けないことを知った。そして、神様に信頼することを教えられました。それから「自分の思いをすてて、神様の御旨に従

っていきたい。」と祈りました。今、私は神様の御計画でしかれたレールの上を、パウロ様のように、前向きの姿勢でキリスト・イエスを目標として走っていきたいと強く思います。

病床も神の国（入院記録より）

秦　タネノ

「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみなをほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。」

（詩一〇三・一～二）

昭和五八年十一月六日聖日の朝、いつものように準備をしていたのですが、体の具合が何となく変だな…と思い、横になり休みました。それから三十分程も過ぎたでしょうか。急に悪感・嘔吐に続いて、急激な胃の痛む様な感じでした。息苦しく見動きすらできなくなり、全身汗だくとなって、嘔吐はしきりと続きました。あまりにも突然のできごとでしたので、自分ではどうすることもできませんでした。そのまま救急車に運ばれて八幡市立病院に入院する事となりました。

「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主にせめられる時、弱り果ててはならない。主は愛するものを訓練し、受け入れるすべての子をむち打たれるのである。」

（ヘブル十二・五、六）

「すべての訓練は当座は喜ばしいものとは思われず、むし

ろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安の義の実を結ばせるようになる。」

（ヘブル十二・十二）

翌日検査のあと「桑さん、原因がわかりました。膵臓が悪いのです。」と主治医の報告を受ける。急性膵炎（血清アミラーゼ白血球上昇）のため、内科六〇一号室にて治療に専念する身となりました。昼夜を問わず、よせくる波の様に痛みは続き、自分の体を横にもできず、その無力さを思いっきり知らされ、いらだつ思いでした。それに発熱も加わりましたし、苦しみから逃れたいという思いばかりがつのります。

「主よ、この苦しみを取り去り給え」自分の思いばかりです。神の御旨が何であるかを思い見る事も忘れた愚か者でした。眠れぬ夜は長く長く、まるで時間が止ってでもいるかのように思えたのです。

「主よ、お助け下さい。この罪の身を憐み、自分の思いでなく、神のみ思いがなりますように」力なき声は声にもなりません。水一滴すら受け入れる事の許されぬ今の肉体の弱さの中で、イエス様の十字架を仰ぎ見るのみでした。私の罪のために死に給うたみ姿を心に深くとどめながら、幾度と無く祈り続けました。点滴は手から足から一滴一滴体内に吸い取られて、秒を刻むように血管に流れこむ。イエス様の尊い血潮が脈打ち、今私の体内をかけめぐるを信じて主に感謝し、全き信頼を寄せる。

「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」

（コリント人②十二・九）

「わたしの弱い時にこそ、わたしは強いからである」

（コリント人②十二・一〇）

「すべてに時あり」

（伝道の書三・一）

これらのみことばに慰められ、神の試練と信仰への愛のむちを心から感謝し、主にすべてをお委ね致しました。

丁度その日榎本先生が来て下さって深くお祈り下さいました。先生にはご多忙の中を度々問安下さって、本当にうれしゅうございました。感謝な事にその夜は熱も下り、本当に喜び一汐でした。ありがとうございました。心から主を崇め讃美しました。

「主はわたしの助け主、わたしには恐れがない。」

（ヘブル十三・六）

六階にあるこの病室にはカーテンがありませんでしたので、昼も夜も大空を見ることができます。若戸大橋、若松の連山

一望の眺めは実にすばらしい。十一月も下旬というのに素敵な虹を見る。その鮮明な美しさは主の恵みのかけ橋であろうか。病む者の故に見せられる慰めのひとときでした。夜は星の間を流れるように夜間飛行機が灯を点滅させながら、夜空の道をひたすら走り抜ける。眠れぬ私は夜明けを待ちかねるように雲の流れを楽しむ。雲の流れは動物の形を造っては変え流れては生まれる。この変化と自然の動きに神の摂理と恵みの御業を、感動と感謝を持って毎日あきることなく見つめる。神の創造されし天と地、何と雄大な限りなき業であろうか。

「主はとこしえの神、地の果ての創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい」

（イザヤ四〇・二八）

この小さな一室で苦しみにあう事のよろこびに導かれ、又主のおきてを学ぶ幸に専念できて本当にうれしい。このような無きに等しい者を顧みていただけますことは、いっそうの感激にあふれます。

「いつもよろこんでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい」（テサロニケ①五・十六）

十一月十二日やっとオモユが運ばれて来た。私は思わず目をほそめた。久々に喉を通る感覚その美味しいこと、病む者にのみ味わえる恵みであろう。量としては本当にわずかですが、力に満されました。その頃から痛みも薄らいで主にあって眠りも与えられるようになり、薄紙を剥ぐように日を追って明るい思いです。体も少しですが横になれるし、主のご愛を深く覚えました。

「主は恵み深く、そのいつくしみはとこしえにたえることはない」（詩一三六・一）

十一月十三日、今日から自分の足でトイレにも行けるようになった。自由のありがたさを味わう。翌日シャワーも許され、主の憐みと教会の皆様方の熱い祈りにささえられ、癒されつつあることを思い、深く感謝する。神は万事を益として下さるとのみことばに立たせていただき、力強い慰めとなり、平安となって満されました。

十二月三日、六人室へと変る。実に賑やかというか、騒々しい。今迄一人室だったので、特にそう感じるのだろう。神の導きと恵みとを改めて痛感する。

十二月八日、胆嚢の検査でレントゲンを撮る。写真の結果は、思いがけぬ胆石でした。私は半信半疑です。まさか……うそ……ほんと？自問自答する。意外なでき事に夢のようで

す。膵炎も回復に向っている事だし、レントゲンの結果さえよければ、年内に退院もできるだろうと考えていた矢先だけに一寸淋しい。小さな石でない事はレントゲンにはっきり出ている。だとすると手術である。手術の二文字の裏に、ふと主人や娘達にも又相当の心労を煩わす事となるであろうという思いが頭をよぎった。肉の思いである。

「何事も思い煩ってはならない。ただ事ごとに感謝と祈りと願いとを捧げ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとをキリスト・イエスにあって守るであろう」（ピリピ四・六～七）

思慮なき者を憐み、信仰を与え給え。

「神は神を愛する者、すなわち御計画に従って召されたる者たちと共に働いて万事を益となるようにして下さることをわたしたちは知っている。（ロマ八・二八）

十二月十四日、外科の診察に行く。諸々の検査を終えて、十二月二十二日内科から外科三階に移動する。二十六日の手術の予定が翌年一月五日に変更となる。十二月三十一日、今年最後の日二ケ月振りに三日の外泊を許され、我家に帰る。千葉から来てくれた娘と孫、小倉の娘家族を合せて九人の賑やかな正月となりました。例年にない明るさです。主を崇め讃美と感謝を捧げることができました。

昭和五十九年一月五日、午前九時手術室へ。病室を出る時同室の方々が「秦さん、頑張って」と励まして下さる。「ありがとう、行ってきます」笑いながら室を出る。

「わたしの平安をあなたがたに与える。わたしの与えるのは世が与えるようなものとは異る。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」（ヨハネ一四・二七）

想像もできない程の平安でした。「私がもし死なねばならないのなら死にます」（エステル四・十六）当然のようにそう思えるのです。毅然としたと言うのでなく、無に等しいと言うか、全く主にゆだね、明け渡した心境でした。

神様に守られ無事手術は終りました。摘出された胆石は親指の先程の大きさで、おむすびのような三角形のもの七個でした。これだけのものが痛みも動きもしないで、今日の日まであった事を不思議でなりません。すべて主の御計画の御業だと御名を崇め感謝を捧げました。「神のなさることはその時にかなって美しい」（伝道の書三・十一）

一月七日、ベットから起き、トイレにも一人で行く。一月八日、一人歩きしながら六階の内科まで行ってみる。順調に

回復へ向う。一月十二日、十五針の抜糸も終り、十七日入浴許可。皿倉の山々は深い雪に包まれ、厳しいであろう寒さを窓越に思う。生かされている今の時の尊さを思い、よろこびはあふれる。一月二十六日退院。

入院中に榎本先生にお願いをして、礼拝説教等のカセットをたくさんお借りする事ができまして、三ケ月近く病床にて命のみことばを聞かせていただきまして本当に幸いでした。来る日も来る日も十字架の言葉の力を信じて、私の魂はよみがえる事ができました。病床での生活は私の生涯の宝となることでしょう。ベットの上の小さな生活に神様はいつも共にいて、平安と慰めをもって憐んで下さった、ここも神のみ国であると胸せまり、こみ上げるよろこびは強烈な光となって広がりました。病床にてなんという恵みの学課を学ばせていただいた事か……。数えきれない恵み、主の賢明なご計画……。黒く汚れた魂を聖霊の浴室にて洗い潔めていただき、十字架の血潮にて深紅の罪も雪より白くして下さるこの尊い信仰が与えられました。私は声を大にして讃美を捧げたい。世のはじめより私を選び召し給うた主のご愛に応えたい。そしてさらに新しくされて御霊によって歩く者となりたい。あなたから離れては何一つできないからです。

「信仰の導き手であり、また、その完成者であるイエスを仰ぎ見つゝ走ろうではないか」（ヘブル十二・二）

榎本先生をはじめ、多くの兄弟姉妹のお祈りと包みきれないご愛を持って暖かく接して下さったすべての人に、主の平安と祝福をお祈り致します。

ありがとうございました。

さんび

伊規須　太郎

「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである」

（マタイ七・二四～二五）

神様からよし（賢い）とされ、倒れる事の無い信仰を持ちたい、これは私の切なる願いだったが、難しい事のように思われた。しかし、秘訣は簡単明瞭でした。「わたしの言葉を聞いて行えーー」じっと見つめているうちに、「ー行うー」と言っても、色々あるのではないだろうかと気が付きました。マタイ一四章二八～三二節を見る。嵐の湖上でペテロは(1)一人進み出ました。すると主が招かれました。(2)水の上を歩きました。(3)溺れかけました。(4)叫びました。(5)イエス様からつかまえられました。(6)共に船に乗り込んだところ嵐が静まりました。進んで聞いて行ったペテロは何と驚くべき体験をしたことでしょう！私は神様のお言葉を進んで聞きました。すると、次々と主が語って下さって、み心の奥義を開いて下さった。何が神様のみ旨であるか、何が神様と通ずる道であるか、何が神様のお痛みであるか、ーーー私の立てられた使命は何か、神様が何を行おうとしていらっしゃるか、分かって来ました。驚いた事です。ーー公平な報いを与えられる主よ、私をして常に進んで聞く者として下さい。み国の大きな報いを望む者として下さい。霊感賦二四「主よみ旨に我従わん、よしや道は険しくとも　み旨ならば我厭わじ　主よ我が道選び給え」

「わたしによく聞き従え、そうすれば良い物を食べることができ、最も豊かな食物で、自分を楽しませることができる。耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる」　（イザヤ五五・二～三）

不真実な者、果たして従うかどうか分からない私に対して「来なさい、食べなさい、ただで受けなさい、（もう代価は払った）」と命を賭けてしまった神様！それなのに私にはピンと来なかった。神様はその原因をよくご存じでした。「聞け」「聞く事が初めであり終りである」「信仰は聞く事によるのだ」と。私はいかに聞いていたかーーー探られました。赤子は無条件で聞く、分からなくても、言葉にならなくても、反応を示す、やがて成長して総てを知る。その事に気付いた

私は赤子になりました。主が今目の前で語られているとの実感をもって聞きました。するとどうでしょうか、主のあがないの肉と血が私の内に満ちて来ました、私が生きる生活から主によって生かされる生涯に変わりました。変わらない恵みの約束が私のものとなりました。神様の事が分かって来ました。祈りに答えられる身分となりました。神様が証人とし君として立てて下さいました。いよいよ明らかな光栄の中に入れられている事が分かって来ました。驚いた事です。その総ての鍵は、「聞くこと」でした。私はいつも幼子になって、聞きとうございます、助け導いて下さい。賛美一八八「み神の言葉よ、清きふみよ、こよなきかしこさ、何にたとえん」

「兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである」

（ペテロ②一・一〇～一一）

あの欠けだらけであったペテロが、神様のご性質にあずかった驚くべき事実！それはただ、主イエス・キリストの神聖な力によって上から与えられたものでした。神様は同じ事を私の中にも行なわれました。「神と主イエスを知る事によってこの総ての事が与えられる↓↓↓信仰に徳を加えよ（与えられたものとして歩きなさい）↓↓↓そうすれば主イエスを知り実を結ぶ」と、驚いた恵みの循環でした。しかし、「あるようで無いのが信仰だ」とは本当でした。たちまち新鮮な感覚が無くなるのです。そんな私に神様は呼び掛けて下さいました。「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主は今こういわれる、『恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ』：：」（イザヤ四三・一）それは、神様が私に対してなさっている事実でした！私は目が覚めました。自分の身分を自覚しました。ーーー神様のものとされ、神様が中にあって私を生かして下さっているーーー。それは、召しとか選び以上のものでした。その時、開拓伝道の使命を新しくされました。町々を見る目、人々を見る目が変わりました。人々からの反応も変わりました。その総てのキッカケは、お言葉にそのまま従うーーーただそれだけでした。一時間の説教テープを文字にする為に十時間以上もかけてみると、自分がどんなに上の空で聞いていたかが分かって、恥かしくなります。私は「励む」という意味が分

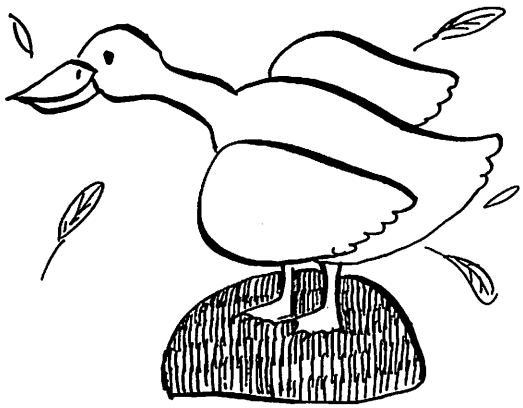
かりました。それはみ言葉に対して、絶対傾聴する事でした。私は十倍（の時間をかけて）傾聴したい。お言葉通り、永遠のみ国の恵みを豊かに与えて下さい。短い地上の一時です。益々励んで、あなたに従わせて下さい。賛美五〇五「たえなる恵みや、みかどは開け、救いの光ぞ、世に輝ける」

「キリストは、その内の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分の死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり、神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである」（ヘブル五・七～一一）

マタイによる福音書二六～二七章に、イエス様の叫びを見る。「死」（父なる神様から永遠に断ち切られる死）から救って頂きたいーーと切に祈られると同時に、「父のみ旨のままになさって下さい」と必ず一歩引き下っておられる。しかし、父の答えは「ーーーー」沈黙でした。イエス様の祈りに答えて、たちまちラザロを甦らせる事のできるお方の答えです。十字架の上で、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか！」と叫ばれた時も同じでした。最後の最後、「父よ！」それでも沈黙、主は「私の霊をみ手に委ねます」と、そこまで従い尽くされた主、それに対して、神は神殿の幕を裂き、地を震い、岩を裂き、墓を開きました。三日目に主を墓から甦らせたまいました。高く神の右に引き上げ、総てに勝る名をお与えになりました。このようなイエス様の従順は私の模範であると同時に、神様のご命令であるし、イエス様に対する神様のお取り扱いは、私に対する約束でもありました。私の重荷の為に祈り求めます。しかしあるものは、神様が「負いなさい」と言われる。いやいやながら耐えるのではありません。それが無くてはならない、神様の深いみ旨があるのです。それがあるから私は全うされるのです。あなたは私に保証の御霊を賜わって、「忍従の力」を与えられました。かの事自体を諦めるのではありません。必ず勝利を与えて下さる。私はそれまで生きているかどうか分かりませんが、必ず成る事を遥かに望みます。それは、祭司とされた私の使命でした。ああ大いなるかな敬虔の奥義！「苦」という賜物！主は誉むべきかな！賛美三七〇「目覚めよわがたま心励み、力の限りに急ぎ進め、命の冠はわが為にぞ、天に行くはせ場に備えらるる」

「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。ーーーー死は勝利にのまれてしまった。ーーーーだから、愛する兄弟たちよ、堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなたがたは知っているからである」

（コリント①一五・五〇～五八）



パウロが最も大事な事として伝えた福音の締め括り、救いの奥義。つながれない筈のものが、つながれるーーーそれは、その一瞬、上からの強烈なみ力によるものでした。「そうです、神様はみ心に従ってどんな事でもなさるーーー私の総ての罪（断絶）をイエス・キリストの上に負わせ、完全に処理して下さいました」と受け入れた時、私の人生はスッと神様につながれました。死という区切りは無くなりました。目が開かれると、「全力」とは「神様の全力」でした、「神様の真実」でした。私の務める事は、自ら（の考え）を捨てて、み言葉そのままに、絶対服従する事でした。保証のみたまがやって来ました。神様から生かされる生涯になりました。「いかなる死にて神の栄光を現わすか（ヨハネ二一章）とあるから、私は普通の死にかたはしないだろうなあーーー」と考えたりしますが、まるで他人ごとのようで少しも深刻な感じはありません。本当に、死は勝利に呑まれてしまいました。主の賜う勝利は誉むべきかな！「労苦（信仰の戦い）は無駄にならぬ」とおっしゃった神様のお言葉は、本当でした。私は知りました。霊感賦三八「勝利、勝利、小羊により、勝利、勝利、勝利、主の死によりて」

「イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現われて、神の国のことを語られた。そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった。『エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、

あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。』（使徒行伝一・三～五）

よみがえりから二週間、主は今何を語っておられるだろうかーーーご自分の生きていることを示し、「約束を待て」とおっしゃる、この一事だった。そしてこれが使徒行伝（聖霊の活動）の原点であり、今日においても総ての原点でした。聖霊のバプテスマとは私にとって遠い事と考えていたが、主のご命令はこれだけであるし、鍵は「主が生きたもう」というこの事実以外に無い。じっと見つめました。一歩踏み込もうとしました。すると「主が生きたもう」というこの事実の中に、どれだけ恐るべき事が秘められているか見えて来ました。創造の初めからの神様のご愛、幾重にも神様を痛める私の罪、ついに罪無き神の子を十字架に付けてあがないを遂げ、私をご自分のものとして下さいました！完成された救い！保証の十字架！明白なよみがえりの事実！手と脇とを示して、「安かれ」とおっしゃる主の前に「我が主よ、我が神よ」と申し上げる事もできないでひれ伏す、圧倒されました！それによって「神の性質にあずからせる」（ペテロ②）との驚くべき事が成就していると分かりました。神様のご計画だから成就したのです。他に何もありませんでした。「約束だ、私の意志だ、私の決定だ、私が完成したのだ、私の性質にあずかるのだ、私と一つになるのだ、聖霊のバプテスマを施すのだ、さあ私自身を受けよ、私が行なうのだ！」声も出ません。しかし、神様はたちまちそうして下さいました。直通というのももどかしい程の近さ、もう満ち足りました。私の願いはむしろ肉体を離れて主と共に住む事です。強烈な衝撃を遺してお別れしたい気持ちです（パウロも同じ事を言っています）。しかし自分で決める事はできません。「主よみ心のままをなしたまえ」と祈ると、今日も「生きよ」と私にいのちを残して下さる。一日一日を、神様の特別なご意志により、特別なご使命に従って生きるのは何と素晴しい事でしょうか！忍苦しながら生涯の報いは何と栄光に富んだものでしょうか！その「無から有を呼び出す神」に手を挙げて祈る、「主よ、み心が行なわれますように。み名が崇められますように」と。賛美四九九「みたまよくだりて昔のごとく、くすしきみわざを現わしたまえ」

「ダビデの子孫として生まれ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」「しかし神のゆるがない土台はすえられていて、それに次の句が証印として、しるされている。『主は

自分の者たちを知る』また『主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ』」（テモテ②二・八、十九）

受難週を迎えて、主のお声を聞く。最後の晩餐の席で、「私を記念する為、このように行ないなさい」（ルカ二二ほか）「互いに足を洗い合うべきである」（ヨハネ一三）と言われる。イエス・キリストを記念し、そのご生涯を仰ぐと、そこに見られるのは、父なる神様の前に、腹を据えられた（全く委ねられた）（開き直られた）（覚悟された）歩みです。じっと仰いでいるうちに、私もまた全く委ねる生涯に入れられました．と言うより、そういう身分とされている事を悟ったのです。私の中には何もありませんが、神様の方がまず私を愛して、み子を送り、あがないの供えものとし、私を神様の手に直結して下さいました。保証がやって来ました。神様が確かに私を知って下さっている！揺るがぬ土台に印刻されている！これほど大きな「生存のあかし」はありません。永遠に残るのですから。小さい者でも、弱い者であっても、最後の息を引き取ろうとする時でも、神様に覚えられる。人は捨て石といいますが、神様は隅のかしら石として受け入れて下さる。驚きました。踊りました。もう何も要りません。そして、すっと、他人の足を洗う生涯に入れられました。それが私の使命となりました。務めてする使命ではありません。生かされる使命です。『「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして主なる汝の神を愛すべし」と「己のごとく汝の隣を愛すべし」』『「主を記念する事」と「互いの足を洗う事」』『「主に知られる事」と「不義を離れる事」』これらはみな同じでした。驚くべき福音！神様のご真実！真理の構図！その道筋！活ける主は誉むべきかな！賛美二六八「真心もて仰ぎまつらん、世のため　呪いの木に　つきたまいし　救いのぬし　我が主よ」

「イエスはこの盲人の手をとって、村の外に連れ出し、その両方の目につばきをつけ、両手を彼に当てて、『何か見えるか』と尋ねられた。すると彼は顔を上げて言った、『人が見えます。木のように見えます。歩いているようです』それから、イエスが再び目の上に両手を当てられると、盲人は見つめているうちに、なおってきて、すべてのものがはっきりと見えだした」（マルコ八・二三～二五）

振り返って見ると、私は霊的盲人だった。神様の事が分からないのに、「これが私の信仰だ――私はこれでよいのだ」と、自分で小さな枠を作る。そんな私に対して、イエス様は「生温い！」と言う代わりに、「何か見えるか」と問いたも

う。「ん？何を？」と身を乗り出した時、神様はご自分の燃えたぎるようなみ思いを（エレミヤの中に燃やされたように）注ぎ込んで目を覚まして下さいました。ただ涙！ただ溜め息！しかし、「泣くな、主を喜ぶ事は汝等の力なるぞかし」（ネヘミヤ八）と、私を全く神様のものとし、ご自由にお用い下さる。イザヤ、エレミヤ、エゼキエルあるいはホセアなど、先覇預言者のように！ーーーこれは一体どうなるのか、全く分かりません。しかし驚いた事です。これは、嬉しいというようなものとは違います。この私が神様の手や足になってしまうのですから。この聖句を繰り返し読む。この順序通りに神様の力が働いて、私の中にすべてのものをハッキリと見せ始めて下さいました。そのきっかけは、「ん？何が見えるのだろう？」という私の反応でした。聖書は何という驚くべきものでしょうか。活ける神は誉むべきかな！賛美五三三「奇しき主の光　心に満つ、み空わたる日の　かげにまさる、ああ主よ　我が主よ　輝くみ姿を、胸に映すとは　我が主の恵み」

「しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」（イザヤ四〇・三一）

二六節には、「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ」とある。すべてのものに驚き、目を輝かせている赤子のように、私も目を開かれた。神様のみわざは何と偉大なものだろう。見える世界、見えない世界、その果てしない広がりにただ恐れ戦く。この小さい者が、今、ここに生を受けている事は、神様の驚くべきご計画によるのです。「待ち望めーーー」とあるから、み言葉に、祈りに、賛美に、何とかしてと一歩踏み出して食いつく、「（おのが日を数えて）知恵の心を得しめたまえ」と。すると神様は答えて下さいました。力を与え、高みに引き上げ、次々と走らせて下さった。一体どうなって行くのだろうと、恐ろしくなるような恵み！しかし多くの苦難を受けて栄光に入られたイエス様（ルカ二四）の後に従わせて頂くことは最高の栄誉、最大の報いです。私に与えられた祈りのご用の為に、私は休みません。神様が休まれないのですから。「死ぬに時あり」とおっしゃいました。今ここで、尽くす機会を与えて下さった事を感謝します。主はほむべきかな。霊感賦二四ー三「主よ、み前に待ち望める我に　み旨示したまえ、さらば我は迷う事なく、正しく主につかえまつらん」

「正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。

善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである」　（ロマ五・七～八）

イエス様にとって、何の関係もなかった私、いやむしろ不従順な罪人であった私の為に、わざわざ進んで死んで下さった神の子イエス・キリスト、父なる神のご愛！冷ややかな私を永く忍耐するたまらない愛の苦悩！その事に目覚めた時、私は溶かされました。何もかも捨てて生涯お従いさせて頂きたい――「熱心はいらぬ」と言われても、そうせずにはおられなかったのです。すると主は喜んで受け入れて下さいました（マルコ一四）。保証（の聖霊）を下さいました（使徒行伝二）。私が誇るのではありません。神様が誇っておられるのです。「私が進んでそうしたように、進んで私に答え、為し得る限りを為す事は、私の最も喜ぶ所だ。これは保証のみたまだ。私が真実である事、私が活ける神である事を見よ」と。その保証に従って、私の中に神様のご愛（一致直通）が具体化しました。内から次々と私を変えて下さいました。確かに神様は生きていらっしゃいます。狂気のような神様のご愛に対して何をもってお答えできよう、ただこの一日を、進んで従わせて下さい。賛美三三二「主は、許しといつくしみと、救いをもて下りませり、豊けき賜物　身にぞ余る、ただ身とたまとを　献げまつらん」

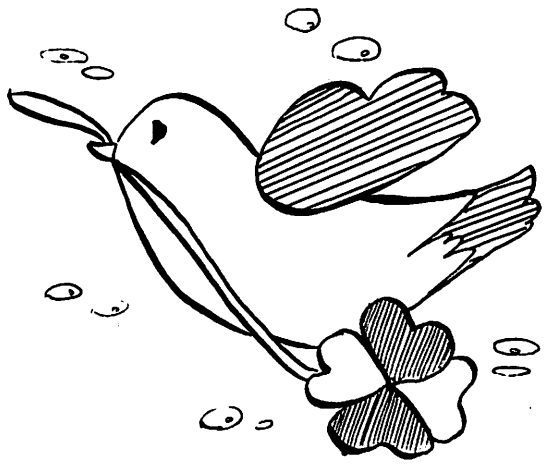
「主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょう。あなたの栄光は天の上にあり、みどりごと、ちのみごの口によって、ほめたたえられています。」（詩篇八の一、二）

「私が主だ、主権を認めよ」との強烈な主張に圧倒される。これは聖書全巻の鍵だった。そして「私を敬う事実がどこにあるか」と厳しく問われる。「スジを通せ、通したらそのように報いる」というのが信仰の簡単明瞭な法則でした。かたくなで無知であった私が、ついに全面降伏させられて、絶対に神様の主権を侵さないという立場に立つと、神様が全く低くなって私と共に住み、栄誉を与えて、万物経営の業に加えて下さった！「創世記二章「治めよ」）。「私が永遠の計画に従って万物を動かすから、お前は祈れ」とおっしゃる。何と驚いた事だろう。何なればこんな者を召したもうたのか！恐れ戦きつつ祈りを積む。「すべて主の名によって求めるものを与える為に、お前を立てたのだ」（ヨハネ一五）とあるから、必ず答えられる。全世界を一新する神様の力がまさに動いています。あなたのみ名が崇められますように。賛美六

六「聖なる聖なる聖なるかな、み手のわざなるものみなは、三つにいまして一つなる、神のおおみ名、誉めまつらん」

「あなたは王宮にいるゆえ、すべてのユダヤ人と異なり、難を免れるだろうと思ってはならない。あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救がユダヤ人の為に起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。あなたがこの国に迎えられたのは、このような時の為でなかったとだれが知りましょう。」

（エステル四・一三～一四）



エステルは私の事、アハシュエロス王は神様のひな形であると分かりました。そしてエステルが身を挺して王に訴え、同胞を救ったその生き方は私の模範でした。

永遠から永遠に亘る時間の中で、今という時を目掛けて、私の短い命を地上につかわして下さっている！二重にも三重にも捨てられるべき者を、十字架により買い取って王妃とし、神の皇太子とまでして下さっている！それはただ神の民の救いの為（命乞い呼ばわり祈らせる為）であると分かりました。「このような時の為でなかったとだれが知りましょう」という間接的なお言葉だからといって、どうして冷やかにしておられよう。「まさしくその為であると私は知りました」と踏み出すと、私の心の中に保証を与えて下さいました。神様のお痛み（主のご忍耐、叫び、涙）です。民数記一一の一一からのモーセの祈りが私のものとなりました。しかしそれが私の使命ですから苦しくはありません。大きな報いが伴っています。神様の奇しき救（エステル記五章以降）がもうそこに見えます。主よ速やかに来たりたまえ！賛美一七四「待ちに待ちし主は来ませり、ハレルヤ、栄あるかちうた　いざ共にうたわん」

「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。また、みな互に謙遜を身につけなさい。神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである」

（ペテロ①五・五）

神の恵みの大原則といわれるが、若いとは？長老とは？年令か信仰年限か、それとも人間的に立派とかーーー？謙遜とは？神様の恵みとは？簡単なようでなかなか分からなかった。しかし「私を尊ぶ者を私は尊ぶ」と少年サムエルに奥義を開きたもうたのを見て、神を敬い、神に受け入れられ、神が働いて下さっている人こそ、長老であると分かりました。また、「私を受け入れる者は私をおつかわしになった方を受け入れるのである」とあるから、個人を見るのではなく、ふさわしい人から、神を尊ぶ事を学び、ならう。すると神様から受け入れられる。これは生涯の別れ目となる重大な問題。聖書の中に失敗例を見て自ら戒める。神様は人間関係を通して、神様に謙遜であるよう求めておられました。多くの失敗を重ねてやっと分かりました。あなたの保証を頂いて、その道筋の真実である事を知りました。賛美二一三「神の人よ、神の人よ、み恵みときわにあれや」

「神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものとを求める人に、永遠のいのちが与えられ、他方では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に従う人に、怒りと激しい憤りとが加えられる」（ローマ二・六〜八）

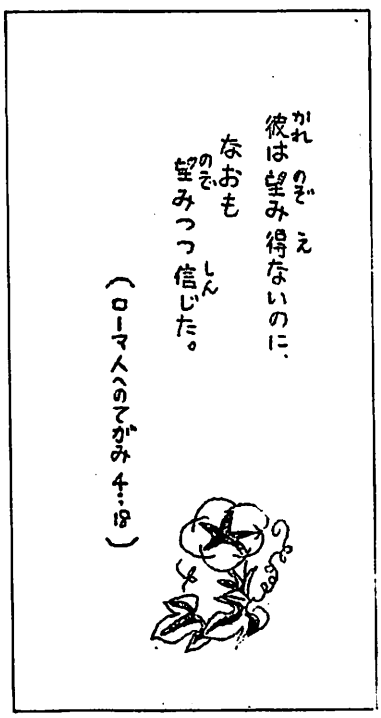
善とは？不朽とは？永遠の命とは？ロマ書のむつかしさ！徹底して罪の恐ろしさを指摘される神様のご目的は、どうする事もできない罪のとりこに対して、「イエス・キリストこそ福音だ」と、救の道を与えて下さる事でした。「善」とは「与える」とおっしゃるお言葉に従う事、「これだ」と掲げられたキリストに従う事でした。主は多くの人に仕え、命を与える為に来られました。そして神のみ座の右に挙げられました。捨てられた石が隅のかしら石となりました。家の土台石は隠れた所で、家のある限り総てを支え続け、最後に現われた時は取り除かれる。しかし、それは石にとって最高の誉！わかりました。私が召されたのは、同じ道を歩くためでした。「貧しい人はいつもあなたがたと一緒にいるから、いつでも心のままに助け得る」とのお言葉が輝いて来ました。私の周囲にいろいろな問題があり、いろいろな人があるのは、私にとってむしろ恵みであり、その中で祈るのが私の使命でした。キリストがかしら石とされたように！使命が終って取り除かれる時、どんなに大きな誉を受ける事だろう。永遠の命とは神様から「よし」とされる事でした。「受けるより与える方が幸である」とのお言葉がわかりました。私の生きかたが逆転しました。あなたの使命に進ませて下さい。霊感賦

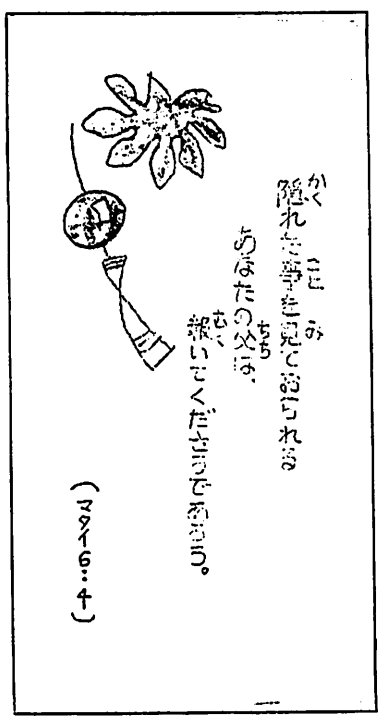
二三ー三「いくさ激しき中をイエスと、魂めあてに進むは誰ぞ」

「キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖霊の証印をおされたのである」（エペソ一・一三）

エペソ人への手紙を冒頭から繰り返し読んで狂喜する！読み進む事ができない。どんなに神様をあがめても、ほめたたえても足りない！こんな者を選び深め、神の子たる身分を授けるよう、世の創めの前から定めて下さったとは！更に加えて、神様の奥義にあずからせ、私の居る所に居らせるとおっしゃる。今はもう自分の為に生きる事などどうしてできよう。ただ神様の懐の中にあって手を挙げて祈り、時満ちて実現されるご計画を待ち望むのみ。かつての私がこんな生涯に変えられた秘訣は「彼（キリスト）を信じた」それだけでした。簡単な約束の陰にどれほど大きな神様の愛、知恵、力、真実がある事だろう。キリストを下さった程のご愛をもって私に全部の恵みを賜うことを決定し、私が「ハイ感謝します」とお答えすると、「ヨシ」と証印をおして下さった。「キリストにあってーーー御子にあってーーー」と九回もある。「キリスト」という名は何と尊く何と高いものだろう。その名を賜わった父なる神は誉むべきかな！賛美二六九「主なるキリスト、イマヌエルよ、いかにその名のうるわしきやーーー」

昭和四八年「ＣＳ御言カード」から





「汝の信仰汝を救えり」

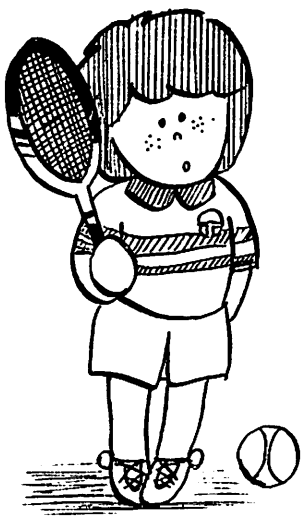
大石祥代

聖名を崇めて感謝いたします。

西岡たかしちゃん、おめでとうございます。

あなたは大変な怪我の中から、イエス様によって癒されましたね。その後もお変りありませんか。毎日お元気で学校に通っておられる事と思います。心にはありながら、今日まで御見舞にもお伺いしませず、お手紙も差し上げませず、御無沙汰ばかりで申し訳もございません。お許し下さいませ。

過ぐる日、あなたにとりまして忘れられない日となった事と思います。私にもその翌日だったと思いますが、安東兄より電話が入りました。それは「前田教会の方で西岡たかし君という方が交通事故にあいまして、大変な怪我です。重傷だそうです。祈って下さい：：でも、たかし君はそんな中にあって、『イエス様がおられるから大丈夫』といって、却って御両親を励まされておられるそうです。」との事でした。私もその時、あゝそれなら大丈夫、必ず癒されるとの信仰が与えられました。それから毎日毎日お祈りしました。牧師先生、奥様、又他の方々に状況を教えていただきましたが、お医者様が最初に気が付かなかったところ、腎臓や他の内臓等怪我の部分が多くなって何回も何回も手術されてる由、お聞きするところでは悲観的なことばかりでした。でもその度毎に、心の中で大丈夫必ずイエス様は癒して下さる、そして、たかしちゃんの信仰を神様は受入れて下さってるからと確信させていただきました。丁度私もいろいろと戦いの中にあって恐れおののくような事ばかりでしたが、毎朝の祈りの時、たかしちゃんのお名前を唱える度に、そうだ、今、たかしちゃんは生死の中を彷徨っておられる、その中でイエス様がおられるから大丈夫といって頑張っておられるのに、私など自分を省みて恥かしく、神様に立返り祈り求め信じさせていただきました。神様はたえず「恐れてはならない、私はあなたと共におる。おののいてはならない。私はあなたの神だ」（イザヤ四一・十）と力づけ励まして下さいました。それからやがて、た



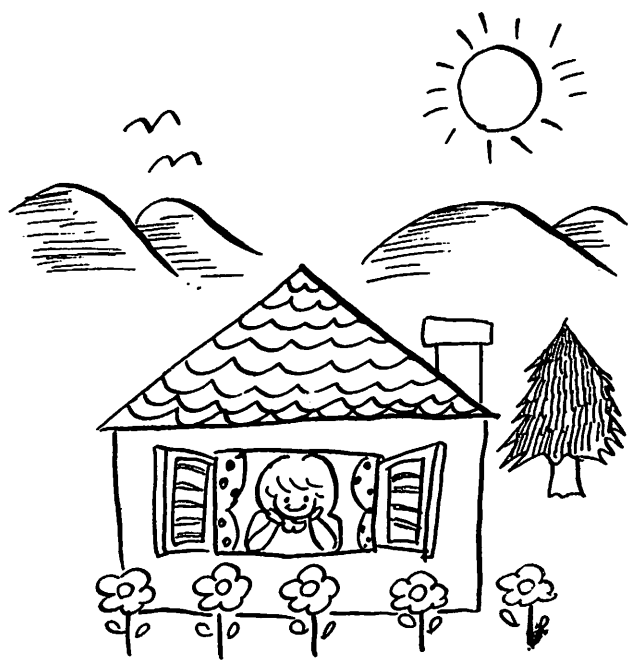
かしちゃんは学校に行かれるようになったとのお便りを聞いた時身が引き締る思いがしました。万才と叫びたくなりました。たかしちゃん、よかったですね。あなたはあの戦いの中から見事に御全快されました。「あなたの信仰があなたを救ったのです」（マルコ十・五十）この聖言のとおりでした。私もいつもたかしちゃんに励まされ、聖言を信じる事ができました。主は御栄光を現して下さいました。主は信じる者を決して恥かしめ給いません。この苦しみを通った者、そして神様に答えていただいた者のみが知る大きな喜びと神様の御愛を今噛みしめております。たかしちゃん、改めてもう一度ありがとう、あなたによってどんなに励まされた事か、感謝致しております。主が豊かにたかしちゃんにお報い下さいますようお祈り致しております。生ある限りこの感謝と祈りはたえません。いつも神様を崇めて信じて、神様の前に歩いてまいりましょうね。

たかしちゃんはこれからも証し人として神様が尊くお用い下さいます事を信じております。どうぞお体を御大事にして下さい。御両親様にもよろしくお伝え下さいませ。これら一切の事、尊い主の聖名によって感謝いたします。

アーメン

たかしちゃんへ

追伸　いつかお目にかゝる日を楽しみにしております。



富士山

広田　寿

人はなぜ、こうも、うかつというか体験させられなければ気がつかないことが多いものなのだろうか。

度々、社用で上京していて、仕事の都合で帰りが定まらぬことが多く、帰りの便はオープンで切符を求めていた。空港へ行けば必ず乗れたからである。指定の航空会社の便でなくても、相互に融通してくれる。切符はもっていることだし、当然乗せてもらえる権利があるくらいに思っていた。

ところが、そうはいかないことが、はじめて起こったのである。会議が進んで話し込んでいる内に時間が迫り、いつものようにギリギリに空港にかけ込んだ。めざす便はどこも満席、最終便まで席がない。ロビーはすごい混みようである。どうして今日はこんなに人が多いのだろうか、考えてみると週末に加えて連休前夜であった。ビジネスマンも多いが、家族連れもいる。おそくなっても何とか今日中に帰りたいもの。考えてもみなかっただけにいささかあわてた。そして空席待ちの列へ走った。三社のそれぞれのカウンターで番号札をもらい待つことにした。あてのないキャンセル待ちである。

おそくかけ込んだので番号は百番を超えていた。待つこと三時間余り、次々と出発する便は何れも十人から二十人しか席の余裕がなく、右往左往して、あげくの果てはくたびれだけをかかえ、群がる人々と共に翌朝分の予約をして、近くのホテルへ散っていく羽目になった。

ホテルに入ってから『帰れなくなった』と家に電話を入れた。『折角の祝日だから、ゆっくりしてきたら』と家内の声が九州で笑っていた。『仕事が残っていて朝の一番で帰る、忙しいんだ』と受話機をおいた。このところ少々仕事に追われている。仕事、仕事とゆっくり旅も楽しめないのか、仕事を盾にしているようで、チョッピリ反省。今月もう一度出張がある。今度は帰りも予約しておくぞ！今からナマスを吹く思いでいる自分がおかしくなった。

朝の飛行機はガラ空きで、五五〇人乗りが半分くらい空いていた。朝早かったせいもあったのであろう。せめて、昨晩この半分くらいでもあったら、みんな乗れただろうに……。機内食をほおばりながら、未練がましくもまだ考えていた。

天気は快晴、富士山は今日も美しかった。

きよし

正野真宏

――次男誕生――

わが子よ、
神の摂理により我らに託せられた幼い魂よ、
わたしは、お前を深と呼ぼう。

お前が成長した時は、どんな時代でぁろうか。
平和で幸福な世であろうか。
　否、そうではあるまい。
世はますます混乱の度を増し、
　神の前に乱れて暴虐が地に満ちるであろう。
しかしわが子よ、その中にあって、
ノアのようにひたすら御言を信じ、
深ぎよく神に従ってほしい。
そこに人間として本当に生きる道がある故に、

お前の長い人生において、困難が立ちはだかって前進できない時もあるだろう。
その時お前は、心弱り、頭をうなだれるかもしれない。
しかしわが子よ、その時は
エリコの城壁を前にしたヨシュアのように
神の前に深ぎよく靴を脱ぎ、
僕となって軍勢の将なる御方に従ってほしい。
それが勝利の秘けつなるが故に。

神がお前の主である。
神はお前をどのような道に導かれるであろうか。
神がお前を導かれる時、心して御声を聞くように。
そして御声を聞いたなら、
信仰の父アブラハムのように
深ぎよく国を離れ、親族に別れて、
神の示す地に行かなければならない。
それが祝福を受ける道なるが故に。

それゆえわが子よ、深ぎよい者となれ。
わたしはお前を深とよぼう。

――日記から――

昨日、ママときよし君がママの御里から帰ってきた。五月十二日以来だから二七日ぶりである。これで漸やく家族が揃った。

小さな小さなきよし君、早くも我家の人気者そして中心人物となった。

今までママがいなくて、何かと不自由があった。ママが帰ってきて、これでよくなると安心していたら予定が狂った。ママの八～九割はきよし君が独占してしまうのである。

仕方がない、仕方がない。

あきらめよう。残念だがきよし君にはかなわない。とにかく早く大きくなっておくれ。

――きよしの挨拶状――

拝啓　主の御名を崇め讃美いたします。

僕は「正野　潔」、初めて御挨拶いたします。いつも僕のためにお祈り下さり、また先日は御祝までいただきまして、本当にありがとうございました。

僕の名前は、パパとママ（発案者はママらしいですけど）が詩篇二四篇「主の山に登るべき者はだれか。その聖所に立つべき者はだれか。手が清く、心のいさぎよい者、その魂がむなしい事に望みをかけない者、偽って誓わない者こそ、その人である。」（三～五節）から、潔ぎよく神に従う者となるようにとの願いからつけてくれました。（大体、親というものは、自分に欠けた所を子供に期待する傾向にあるので、チョット荷が重いって感じなんです。）

僕が生れたのは五月十二日、生下時体重は二八六五g、今はやりの省エネ型で小さいですけど、とても元気です。

パパはもう四二才にもなるそうです。見たところあまり丈夫そうでもないし、いささか頼りないのでチョット心配です。でも、きっと神様が力を与えて下さるでしょうし、パパも僕の顔を見てたら元気が出て来たといってましたから、頑張ってくれると思います。

六月七日、我家にママと一緒に帰ってきました。みんな歓迎してくれました。兄と姉は学校から帰るとすぐ僕の所に飛んできて、だっこしたりオシメを替えてくれたりします。僕がチョット愛想笑いをしてやると、いよいよハッスルです。何だか僕中心に家の中が動いているようです。

僕は、皆様の仲間入りして間もないので何もわかりませんが、パパから「沢山の方々が君のために祈って下さったのだ

よ。だから、君からも感謝して、今後ともよろしくお願いしますと挨拶しなければいけない。」と教えられましたので、書面ではございますが、御礼かたがた御挨拶させていただいた次第です。

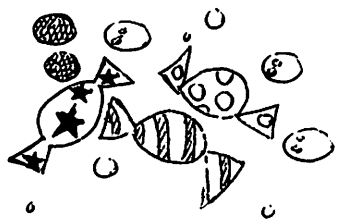
皆様の上に主の豊かな祝福がありますよう、ママの乳房を吸いながら祈っております。

敬具

昭和五五年六月吉日

正野　潔

各位



―きよし―

きよしが笑う
きよしが驚く
きよしが泣く
きよしが眠る
この小さな顔が
いろんな表情をする
きよしがおんぶされる
きよしが食べる
きよしがシッコする
きよしが風呂に入る
手ばかり取るこの小さなきよしが
私達には
大きな喜こび
大きな慰め
大きな希望

―きよしとママの会話―

。きよしがママに聞く
「こうは？」（これは）
『ライオンさん』
「ワァオ！」
「こうは？」
『お犬さん』
「ワンワン」

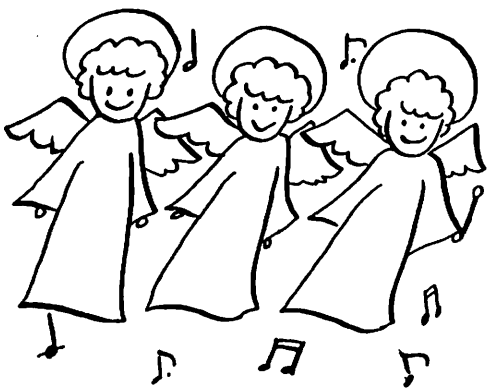
。ママがきよしに聞く
『これはだれ？』

「ジットン」（兄ちゃん）
『これは？』
「メメ」（姉ちゃん）
きよしの新造語

。ママが隠れて梅酒を飲んでいた。目ざとく見つけたきよし、両手を出して
「きよッチンは？」

――きよしの信仰――

。雷を伴って激しい雨が降り出した。
きよしは雷が怖いらしく、ゴロゴロと大きな雷鳴のたびに私の所に寄り添ってくる。そして真剣な顔をしていう。
「パパ、エス様の部屋に行こう。」
（エス様の肖像画をかけている部屋がある。）
「どうしてあの部屋に行くの。」
「だってエス様は強いもん。エス様だったら大丈夫だよねエ。」
。きよしが風邪を引いた。
その日が海老津の集会の日であったので、野村先生にお祈りしてもらうように言っておいた。
それで集会が終って先生にお祈りしてもらったきよし言わく、
「ママ、お買物に行こう。僕、自転車に乗ってゆくよ。」
「だめよ、潔は風邪を引いているのだから。」
「大丈夫だよ。」
「どうして？」
「だって僕、野村先生にお祈りしてもらったもん。」
（幼な子の単純な、本当に単純な信仰に教えられる。主が幼な子のようにならなければと言われたわけがわかったような気がした。）



サフラン会

古野　とみ子

「荒野とかわいた地とは、楽しみ
　さばくは、喜びて花咲き
　さふらんのように　さかんに花咲き
　かつ喜び楽しみ、かつ歌う。」
（イザヤ・三十五・一～二）

。昭和五十四年

・三月二十五日

「創世記・二十八章十五節」

サフラン会（青年会）に、三十一才で出席しました。若い人達にまじって、楽しい一時。戸畑伝道所に来るお爺さんが、私の父であるということがわかった日であり、多くの中で、太田久美さん、野口美加さん、荒井弥生さん（現在、熊本の希望ケ丘教会員）と仲良くなり、イエス様の話に夢中になった一日だった。

・七月二十九日

「ローマ人への手紙・八章五～六節」

・十月二十一日

「伝道の書・十二章十三～十四節」

。昭和五十五年

・二月二十四日

「創世記・二～三章」

よいお天気に恵まれ、念願だった牧師館にて。エステル会の皆様の御好意により、昼食にかしわごはんを美味しくいただきました。春休みだったので、帰省していた大学生などで、久しぶりに大勢集った楽しい一時。

・五月四日

「ローマ人への手紙・一章十六～十七節」

受洗した感謝の証をする。（胸ドキドキ！）

・八月十日

「箴言・三章五～六節」

結婚について語る。

・十月五日

「ヨハネによる福音書・二十一章二十二節」

・十二月二十八日

「テサロニケ人への第一の手紙・五章十六～十八節」

。　昭和五十六年

・二月二十二日

「ヨハネによる福音書・十六章三十三節」

・四月二十六日

「テモテへの第一の手紙・四章十二〜十三節」

・六月二十七日

「ガラテヤ人への手紙・五章十六節」

・八月三十日

「箴言・三章五節」

司会者を「い・ろ・は」順に。

献金は、讃美歌をうたいながら。

・十月十一日

「使徒行伝・二十章二十一節」

西亨子さん（現在、岩井さん）の歓迎会と、中国旅行の話を聞いた。

。　昭和五十七年

・二月二十一日

「ヨハネによる福音書・十五章九〜十節」

・四月四日（聖餐式）

「テモテの第一の手紙・四章十二節」

太田久美子さん（現在、鳥越さん）最後の司会。

青年会に年令制限ができた。

太田さんの後をひきうけ、会計になった。進んで連絡係もしたのだが。

・五月三十日

「伝道の書・十二章一節」

塚本敏子さんと口げんかをした。自分の性格上ゆるせなかった。そして、祈らず悩んだ。（すいかの季節になると思い出す。）

・七月十一日

会社の旅行のために、欠席しました。

・九月五日

「ルカによる福音書・二十三章四十三節」

榎本先生がメロンをお好きだと聞いたので、祈ってました。でも、私が買ってきた盛の多い安価なホームランメロンは、実に歯ごたえのあるメロンだった。それに、先生は年のわりにはお若いので……と、自分の知識に頼って失敗。

・十月十七日

「ホセア書・六章三節」

会員が少ないので、話題がとぎれるのではないかと、司会をひきうけていたので心配しました。でも、神様の話は尽きないものであるし、また、かわきをもって近づく事の大切さを教えられました。

○　昭和五十八年

・二月二十日

「ガラテヤ人への手紙・六章七節」

広瀬和美さんが会計になりました。

・六月十二日

「詩篇・十六篇八節」

サフラン会を若い人にまかせて、ボランティア活動に。（ところが、そうはうまくいかなかった。）私は祈らず、つぶやいた。

・七月二十四日

「ヨハネによる福音書・二十一章二十二節」

自発的に司会をする人がなく、しぶしぶ引きうけました。でも、私の大好きなみことばだったので、感激しました。

「汝は、我に、従え。」

・九月四日

「ヘブル人への手紙・十二章十一節」

・十月三十日

ボランティア活動のために欠席しました。

○　昭和五十九年

・一月二十九日

（箴言・三章一～十二節（特に一～八）」

父の証の文章を書きたい為に、榎本先生と昔話（戸畑の工大前付近）をしました。先生はよく覚えていらっしゃって、すごく感謝しました。

・三月十一日

「コロサイ人への手紙・一章九～十四節」

野口美加さんが会計になりました。瓜生美知子さんが、新しく会員になりました。広瀬さんも祈りに答えられ、元気になりました。

・五月二十日

「ホセア書・六章一～六節」

小田安江さんが新しく会員になりました。初めて、祈って司会をさせていただきました。三月の牧師館訪問の時に恵まれた物を作って、おやつに出しましたところ、先生が喜んで食べて下さり、感謝しました。（バナナとチーズの天婦羅です。）

「わたしたちは、主を知ろう。

せつに、主を知ることを求めよう。」

（ホセア書）

公開実用新案公報（昭五九・一三一四四）

伊規須　太郎

一、考案の名称

両面から挿入できる本棚式スリッパ収納可動棚

二、考案者（出願人）

北九州市戸畑区小芝二ー一ー一三　伊規須　太郎

三、実用新案登録請求の範囲

(4)　考案の詳細な説明

五、図面の簡単な説明

六、図　面

七、参考写真

（以下に順次記します。）

三、実用新案登録請求の範囲

(イ)　棚板2に、端部に可撓性を有する仕切板3を交互に逆向き、かつ、若干斜めに開口するよう配列し、取付ける。

(ロ)　前項の棚を数層重ねて外箱1に納め、箱の底面にキャスター7を取付ける。

以上の如く構成されたスリッパ収納棚。

四、考案の詳細な説明

この実用新案は、スリッパの底面を向かい合せ、たて向きとした状態で、本棚のように、かつ、その両面から挿入し、棚箱の底面にキャスターを取付けたスリッパ収納棚に関するものである。

従来スリッパの収納は、通常の平棚に置くのがごく一般的であった。家庭の玄関等スリッパの数が少ない場合は、種々の形式のものが工夫されているが、病院その他公共建物など多数のスリッパを収納する際には、下記のような問題があった。

(イ) 平棚に置く場合、スリッパの巾の分だけ棚が必要なことは言うまでもないが、スリッパの出し入れに際して手先をかなり棚に挿し込むので、棚板の上下間隔はスリッパの厚み（高さ）の二倍以上が必要であり、空間的にロスが大きい。

この為どうしても充分な場所を確保する事がむつかしく、例えばスリッパ棚と靴棚とが接近している場合、靴とスリッパを同じ棚に納めるようになりがちであり、スリッパに汚れが付着して、これを屋内に持ち込む事になる。

(ロ) 平棚に置く場合でも、スリッパを重ね合せ（一方を他方の中に挿し込む）約半分の容積にすれば当然収納効率は上るし、極端な場合は三足も四足も連続して挿し込み、あたかもエビのような形にして箱にでも押し込めば、たしかに場所はとらない。しかし、これらは不潔であり、不快である。取扱いにも手間どる。

本案はこれらの問題点を取除く為のもので、収納効率を高め、不潔感をなくすため、スリッパの底面どうしを合せ、たて向き（スリッパの長手方向は水平に、スリッパの底面は垂直にする）に持って、踵部から先に本棚に本を挿し込むような感じで軽く押込むようにした。これを棚の両面から挿し込めるようにし、その際、棚に直角にではなく、若干斜めに向ける事により、反対面のスリッパと正対向しないで、互い違いになるようにした。これにより棚の奥行を著しく節減し得る。次にこの棚を表裏自由に回転して使用するためと、適当な場所に移動するため箱の底面にキャスターを取付ける。勿論キャスターそのものは極く一般的なものであるが、本案の構造使用法から欠く事のできないものである。

これを図面について説明すれば、端部に可撓性を有す

る仕切板3（厚紙4、角材5により組立）を棚板2の上面に、交互に逆向きで、かつ若干斜めに口を開くよう配列して取付ける。閉じ合う部分の外側にゴム帯紐6を取付ける。このような棚を数層重ねて外箱1に納める。キャスター7を取付ける。

スリッパを挿入する場合は、底と底を合せ、爪先部を持ち、たて向きにし（即ち、スリッパの長手方向を水平に、底面は垂直にする）、かかと部から先に挿入し、正面より僅かに左に向けて軽く押し込めばよい。

・本考案は、このような構造であるから取扱いも簡単であり、足に直接ふれるスリッパ面に汚れが付く事もない。スリッパの爪先を手で持つことは、他の部分にふれるほど不潔感はないと思われる。このようにして多数のスリッパを効率よく整然と整理することができ、狭い場所でも適宜回転し、移動して使用することができる。仕切板の構造から明らかなように、スリッパはかかと部を軽く狭まれており、移動や震動により動くことはない。収容力は同寸法の固定棚に水平に置く場合に比べ、約四倍となる。（参考写真の場合、六十足収納できる）予備スリッパを保管するような場合も、本案の棚を用いれば特別の箱を要せず、このまま適当な場所に移動しておき、必要に応じて持ち出せばよいので好都合である。長く保管する場合も開放された箱に納めるのに比べ、ほこりが付きにくい。

なお、仕切板3は適当な可撓性のある材料を使用すれば中空構造でなくてもよいし、ゴム帯紐6を省略してもよい。また、厚みが過大でなければ紡錘形の断面である必要もない。

五、図面の簡単な説明

第一図は、本案棚部の平面図である。

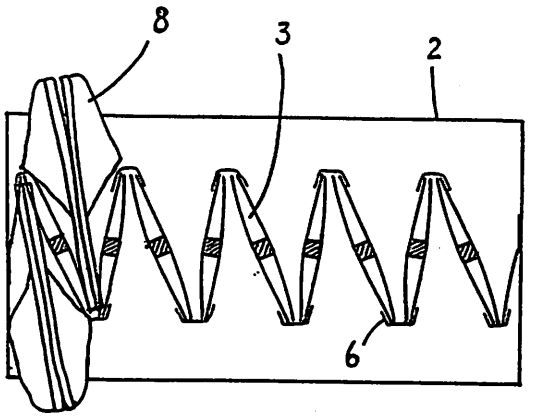
第二図は、本案全体の斜面図である。

第三図は、仕切板の側面図である。

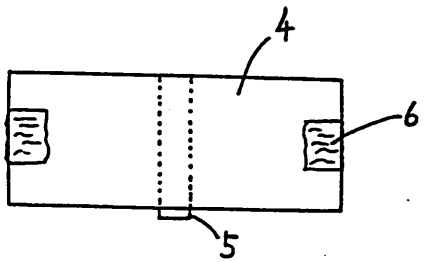
1は、全体の外箱
2は、棚
3は、仕切板
4は、厚　紙
5は、角　材
6は、ゴム帯紐
7は、キャスター
8は、スリッパ

六、図　　面

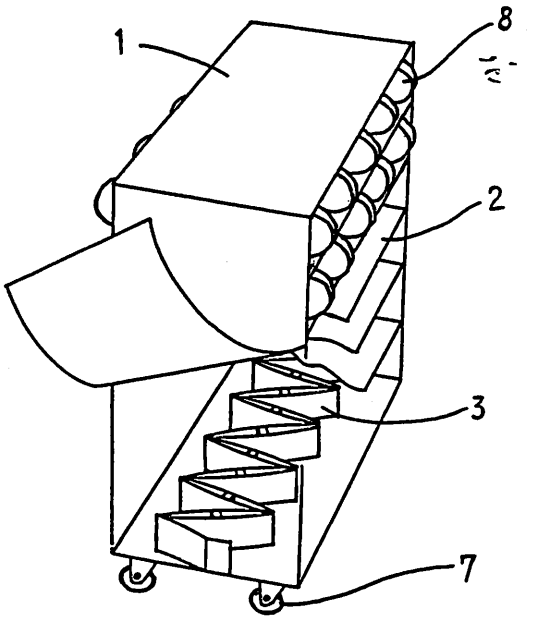
第　1　図



第 3 図

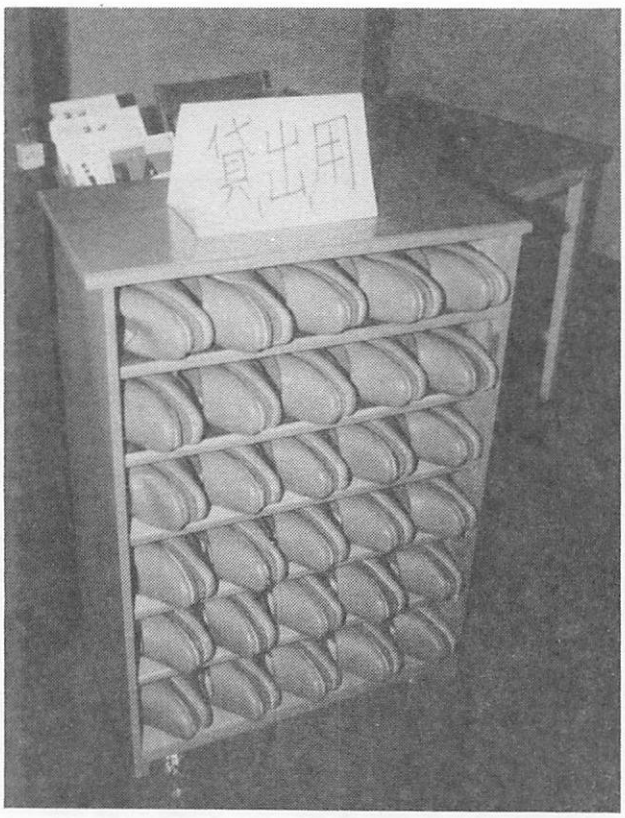


第　2　図



実用新案登録出願人　伊規須　太　郎

七、参考写真



（裏面からも挿入するため、合計六十足収納できる）

「わたしの力は主によって強められた」

綾部時男

「わたしの心は主によって喜び、わたしの力は主によって強められた」

私は今年の活水の群連合聖会に参加させていただき、非常に恵まれ、感謝でございました。神様の深いあわれみとすばらしいご計画の一端として、私のような者をもお送りくださった事を覚えて、感謝を致しております。

四月三十日の夜行列車・徳山駅発一九時四〇分、東京着翌朝九時五〇分、地下鉄千代田線で約三十分程ゆられて、金町教会に朝十時半頃漸くたどりつきました。

新装されたばかりの会堂はさすがにすばらしい。大きな建物を見上げ、神のなされたみ業に思わず感謝をしました。玄関でご丁寧に温かく迎え入れてくださった高橋先生「遠い処をよくおいで下さいました」との一言で、馴れない夜行列車の疲れもすっかり癒されました。受付で名札が渡され、二日分の宿料等計算致しまして、ゼッケン番号一七番・八幡前田綾部時男と横書きの名札を胸に会場に入り、後の席について感謝の祈りを捧げました。

会場狭しとばかりに全国から集われた聖徒の群、どの方の横顔を見ても喜びと感謝に満ち溢れた気高い感じの方たちばかりでした。どなたか一人ぐらい知った方がいるのではと、あたりに目を移しましたが、だれもおりませんでした。けれども、私の内に満ちている喜びは言葉では到底言い尽すことのできない喜びと感謝で一杯でした。その会場の中にたった一人だけ知っている方がいて下さいました。それは救主なる神イエス様でした。「心を強くし、かつ勇め、汝の凡て往く処にて汝の神エホバ偕に在せばおそるるなかれ、おののくなかれ」（ヨシュア一・九）イエス様がいつでもどこでも偕にいて下さる事を覚え感謝でした。

信州教会の杢尾先生の説教も終り、暫らくして手を叩いて主を讃え、会場の天井が割れんばかりの讃美のあの大音響、すさまじい限りに神様をたたえた群の叫び声が今も私の耳にこだまして返ってくるようです。「幸せなら手を叩こう」という歌がありましたけど、臨在の主を身近に仰がせていただき、三日間の幸いな時を与えて下さる主に心から感謝の祈りを涙して捧げました。

昼食の席は階下の大食堂にご婦人聖徒方の心から整えて下さった食卓につき、全国から集われた魂が一同に会して、これ程たくさん与えられ神のみわざに驚き入りました。司会者のマイクが場内に響きわたり、只今から各教会の代表者にお証しをして頂きますと、まず信州長野教会から始まり、九州の前田教会は一番あとで、その間待たされ、足がしびれる程長く感じ、不安な感じもしないでもありませんでした。こんなにたくさんの信徒の方、先生方の前で証しの経験もない私でしたが、神様が「我、汝の為すすべての事をなし給う」とあります。神様にすべてをゆだねて心からの喜びの証しをさせていただきました。

榎本先生が渋谷教会信徒の葬式にお出になった事、後で聞きました。また二日目のお証しの時も家庭集会に行かれ、聖会中もそれはそれは忙がしい日程だった事を覚え、そのひと足ひと足を主が導いてくださるようお祈りしておりました。

結局、食事毎の感謝は三回もさせていただき、その都度神様が備えて下さって感謝でございました。

私如き愚かな卑しい者に御声を聞かせ、活ける生命の真清水を注いで下さるとは、何と尊い事でしょう。今度の聖会を通して今生きている目的をはっきりとお示しくださいました。また、沢山の信徒の方から励まされ、全国の先生、聖徒の方からお便りをいただき、感謝の祈りの毎日を送らせていただ

いております。

神戸山手教会の坊向久正大先生がご聖壇に立たれた時のあのかくしゃくとしたお姿は、到底八十五才とは思えない若々しさでありました。笑顔で私の手を握って語りかけて下さったことは、生涯の思い出として私の胸深く残しておきたく思っております。その時思いました。榎本先生はまだまだ若い、今ようやく壮年期にさしかかったばかりで、今が全盛期である事を覚え、大変感謝でした。いつまでも地上の生涯の中にあって、神様のみ聖言をたくさん開いてくださいという願いからかもしれません。

「神の言を深く味わってそれを信じて従って行きさえすれば、あとは神さまが責任もって下さる」いつも榎本先生を通して教えられる事です。過去の一切をゆるし、現在を力強く歩ませてくださる主は、何とすばらしいお方でしょう。私は今から九年前に脱疽（だそ）という病魔にとりつかれました。右足の血管に支障を来たし、指先が少しずつ溶けて、どうにもこうにもならない最悪の状態が続き、日夜苦しみ、激痛と戦いながら神様にお願いしました。「どうか助けて下さい。救って下さい。この痛みを柔げ、足を切断しないですむようにしてください。そうすればあなたの言うとおりに致します」。その祈りに応えられシーツを感謝の涙で濡らした事、あの中から救われた時の嬉しかったこと決して忘れません。

また、息子は今年二十五才になり、今は子供が二人与えられておりますが、その息子が十八才の夏祭りの夜半でした。自動車事故を起し、大怪我をしました。私は以前母子共捨て、その時四才だった子共でしたが、神様のあわれみで十四年ぶりに同じ屋根の下に住まわせていただく身分になったばかりの事故でした。頭から首筋に流れしたたる鮮血、肩から背中にかけて無残に引き裂れた肉、もう助からないのだろうか、今迄別れていた息子とやっと会えたのに、このまま死ぬるんではなかろうかと思いました。片輪にならねばよいがとも思いました。一晩中祈って祈って祈り続けて参りまして、ようやく朝日が昇る頃、元気を取り戻し、一カ月ばかりの入院で十二針を背中と頭に六針を縫う程度で退院させていただきました。

「人には能はねど神には然らず。それ神はすべての事をなし得るなり」（マルコ一〇・二七）

私はこの時、不信仰をもって神に対し冒とくを犯してなかっただろうかと思いました。ちょうどペテロがガリラヤ湖を舟で渡っている途中で嵐に会いましたが、イエス様が共にお

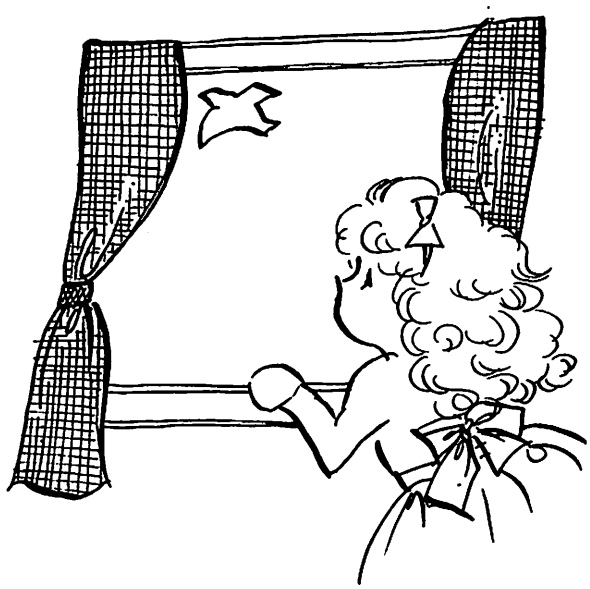
られるのに、激しい暴風を見て恐れおののいたので、イエス様から「信仰薄き者よ」と言われたように、私もその事を深く教えられ、私自身の信仰の薄さをまざまざと浮きぼりにされました。そして今度の聖会でもう一度教えられたのでした。それは今神がやけるような思いで求めておられることです。

「されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む、己が身を神の悦びたまう潔き活ける供へ物として献げよ、これ霊の祭なり、又この世にならうな神の御意の善にして悦ぶべし、かつ全きことをわきまへ知らんために心を更へて新にせよ」（ローマ十二・一～三）

「神の御意を行い、神の御旨にお従いすることが全く献身する事である」。聖会二日目、榎本先生が力強く説き明かして下さったみことばでございました。私のような者にも聖会を通し天の宝を開いて下さいまして、栄を拝し誠に感謝に堪えません。与えられた馳せ場を完全に走り続けて参りたく思っております。神の大庭に咲く小さな小さな花であってもよい、呼べばいつでも答えてくださる神の身辺にありたいと願っております。

溢るるばかりにいただきました恵に感謝の毎日でございます。神を喜ばせ、神の為に生涯を捧げたく思っております。

「汝ら眼を上げて高きを見よ」（イザヤ四〇・二六）



父の枕辺で

正野　真宏

父が倒れたのは、五七年十一月三十日であった。

二日程前から体の不調を訴えて、寝たり起きたりしていたが、たいして悪いような風でもなかった。その日は、日曜日であったので、家内が教会へ行く挨拶に行ったところが、どうも様子が変ですという。急いで行ってみると、父は無表情でベットの上に寝ていた。そして呼びかけても返事もなく、何の反応もない。目はうつろに一点を見つめているだけであった。

これは脳出血だと直感したので、すぐかかりつけの医師に往診を頼んだが、その時はまだそんなにひどいものとは思えず、まして、寝たきりになるとは考えてもいなかった。

診察の結果、やはり脳出血を起しており、早速入院の手続きを取りましょうということで、翌日県立遠賀病院に入院した。

右半身完全マヒを起して、言葉もしゃべれず、失禁があり、加えて肺機能を害って肺炎を併発して、しばらく重篤が続いたが、どうやら小康を保つことができた。そして年が明けて一月に、主治医から内科的な処置は終ったので、リハビリテーションのできる病院に転院して下さい、ここには機能回復訓練施設がありませんからと言われ、ある開業医を紹介されたのであるが、私としてはこれからが大切であるから少しでも施設の整った高度のリハビリのできる所をと思い、幸い産業医科大学病院と若干のかかわりがあったので、無理にお願いしてベットの空くのを一カ月程まって漸やく同病院リハビリテーション科に入院することができた。

さすがに大学病院である。行きとどいた看護と訓練を受けた。食事も今までは食べさせてもらっていたが、自分で動く左手にスプーンをもって食べるように訓練を受けた。見ていると実にまどろこしい限りである。まずスプーンにうまく御飯を乗せることができない。さらに口まで運ぶのが難しい。しかもスプーンが平衡になっていないので、途中でほとんどがこぼれてしまう。折角口に入っても喉の機能もマヒしているので、呑み込むのが非常に困難なのである。そうこうしている内に手が疲れてやめてしまう。私達は食事ぐらい何でもないと思っているが、決して当り前のことではないのである。

リハビリ室にも行ったことがある。プールの中でマヒした手足を動かす練習をしていた。ほとんど硬直した足を訓練士

が無理に曲げる。その時、父は「ヒー！」と悲鳴を上げた。肉親ではとてもできないことだ。そのほか、体をしばりつけて立たせる訓練、動く方の手の訓練のためにぬりえもしていた。しかし、疲れるのかすぐやめてしまうそうである。

そうゆう訓練を二カ月ほど受けた後、主治医から呼ばれた。予想以上にマヒの範囲が広くて強い、車椅子に乗れることを目標にやってみた、薬物治療も併せ行ったが効果はなかった。本人が老令であること、気力が続かないことを考えれば、これ以上の回復は期待できない。後は内科的治療を続けるほかないので、他の病院に移って下さいと言われた。

いわば生涯寝たきりの宣告である。

これまで私達は、きっと癒されるという望をもって全能の神に祈ってきた。死人を生かし無から有を呼び出される神、一言をもって足なえを立たしめた神を信じて、ひたすら祈って来た。多くの方々の厚き祈りもあった。しかし、結果はこのとおりであった。私はやはり失望した。まだ神の前には最終の結論ではないとはいえ、神が与えられた一つの事実である事には違いなかった。祈りが答えられなかったのは、我らの祈り、熱心、信仰が足らない故か……。もし、その事を貫められるならば、私はどうする事もできない。父の努力が足りなかったためか……。そうではなく、からし種ほどの信仰にも応えて山を移して下さる方が、このように導かれたに違いない。これが祈りの答えなのだ。だとすれば、この事実を正面から受け止め、さらに神の大能のもとに自らを低くして寄り頼んでゆくほかない。そのように父にも話し転院する事にした。

良くして下さった同室の方々とも別れを告げ、四月十二日、現在の北九州老人病院に入院した。父は、病院の車で運ばれてゆく間、どんな思いで行く末を考えたであろうか。医学にも見放され、人間的には治る見込がなくなった今、自分は何一つできない、口で意志を伝えることもできない……それでも生きてゆかねばならないのだ。それは、父が今後どのように生きてゆくか、神様から父に課せられた課題のように思えた。

今日、医学の発達によって脳出血でも助かる事が多くなった。しかし、それは死ななかったというだけで、後遺症で寝たきりになった人は、命があるから生きているにすぎない。

そこには人間としての生活がない。人生の大事な終りの時を人の介助を受けながら、今日一日また一日、ただひたすら時の過ぎゆくのを待っているのだ。それは拷問にも等しいとさえ思う。はたして医学が人類に幸福を与えたかどうか疑問である。医学は命は助けても、その後の生き方まで教えてはくれない。かえってそのまま死んでいた方が幸いだったかもしれないのだ。

これから父は何年生かされるかわからないが、ベットの上だけの生活に何が生きる力を与えてくれるのだろうか。

「たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされてゆく。」（コリント②四・一六）

「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である（ヨハネ①五・四）

この時こそ、父が主御自身を求めてゆくならば、主を信じる信仰によって、この中を勇々しく生きてゆくことができる。父にそうゆう人生を送ってもらいたい。主もまたその事を求めておられるのにちがいない。だから、今父に最も必要なのは信仰である。そのためには、まず御言を聞かなければならない。そう思って、私は勤めの帰りにできるだけ寄って、父の世話と共に聖書を読み、祈って帰ることにした。それは父の魂のことを思うとそうせずにはおられなかった。否むしろこれは主の御用であると考えたからである。

幸い父は頭の機能はわりにはっきりしており、こちらの言う事は理解できるのだが、困るのは父の言うことがわからない事だ。

言葉にならない声を出してしきりに訴えるが、私にはわからない。手ぶりでやるように言うが、うまくゆかない。仕方なく、私の方から手当り次第思いつく事をいう。たまたま当ると「ア、そうか」という事になる。身の廻りの事は大体わかるようになったが、新しい事になるとなかなかわからない。その内に父も私も疲れて止めてしまう。その時、父は悲しそうな顔をする。私もなさけない。意志が通じないことの苦しみを味わうことが、しばしばであった。

ある時父が訴える。苦労してやっとわかったことは、退院して家に帰り

たいということだった。そして、声を上げて泣くのである。私も胸がしめつけられるように痛んだ。いっそ連れて帰ろうか。しかし、祈っている内にそれは御旨でないように思える。

それで父に言った。

「お父さんの気持はよくわかる。しかし、今大事なことは、神様の御心に従うことです。ただ帰りたい、帰りたいだけで動いてはいけない。神様が置いておられる所に、腰を据えておりましょう。時が来れば、そうゆう道も開いて下さるかもしれない。それまでは、神の大能のもとで待ち望んでゆきましょう。随分厳しい事を言うようだけど、お父さん、これが私の願いであり祈りです。」

父は真剣な顔になってうなづいた。わかってくれて、私もうれしかった。

父を見ていて失望する事がたびたびあった。

私としては、この時こそ目の色を変えて主を求むべき時と思うので、勢いそうゆう意味の御言を朗読し、話すことが多くなる。ところが、父の方は一向に真剣にならないのだ。話した時は相づちは打つが、何としてもこの中から救っていただきたいという切なる願いというものが感じられない。

そこである時、父に問うてみたが、「できない」と悲しそうな顔をして言う。「どうしてできないの」と聞いても、ただできないの一点張りであった。そしてあげくの果は「何か食べるものはないか」である。

私はガッカリしてしまった。今まで私がやって来た事は何だったのだろう。今父が求めているのは、神の口から出ずる言ではなく、パンではないか。神の愛ではなく、息子娘達のやさしさを喜こび、これに涙しているのではないだろうか。「彼は肉にすぎないのだ。」（創六・三）父はそのようになったのか：：そう思うと悲しくなる。

それにしても、赤ン坊でも泣いて母を求めるのに、どうしてそれができないのだろう。頭の思考力がそれだけ低下しているということだろうか。病気で体力がなくなると気力もなくなる。気力がなくなると信仰もなくなる。将来を望み、神を信ずるというのは、結局は気力が必要である。そうしてみると、年を取るという事は、何と悲しい事だろう。体力も気力もなくなり、そして最も大事なものすら失してしまうものだろうか。若い時、元気な時にしっかり信仰を確立しておかなければならないと思った。

私は、自分のもっている若さと気力を前提にして、それを

持たない父に無理なことを要求していたのかもしれない。父は父なりに精一杯信じているのだ。これを助け支えてゆかなければならない。

父がそうゆう状態であるならば、私達の方こそ御霊が働いて助けて下さるよう真剣に祈らなければならない。父の信仰が問われているというより、私の信仰の方が主に問われているのかもしれないと思った。

それ以来、父に対して励ますことよりも、神の御愛と恵みに信頼し感謝するそうゆう聖書の箇所を読むようになった。

先日、いつものとおり父に聖書を読んでやり、その箇所の話しをしていた。ところが途中から、向いの人の話し声の方に目が行って、私の話しを聞いていない風であった。

私はいささか頭に来てしまった。私が一生懸命話しているのに……、忙しい所、体も疲れを覚えているのを押してわざわざ来て話しているのに……、人が何をしようと関係ないこと、今の父にとって信仰が一番大事なことではないか。そこで私は父に注意を促した。

「お父さん、聞いとるね！」

帰りの汽車の中で、私はふと思った。今までは、私の心には淡い喜こびがあった。神様に従う者に与えられる喜ごびとはこれだなと思う喜こびがあった。これがあるから、自分のような弱い者でも続けさせていただけるんだなというものがあった。しかし、今はそれがないのである。どうして……？

私は父に文句たらしいことを言ったことを思い出した。と同時に、御霊の底知れないやさしさを感じたのである。

御霊はそんな父に決して文句は言ってはいないし、責めてもいないのだ。私は父に恩を着せ、そして裁いた。しかし、御霊はどこまでも弱さを思いやる御方なのだ。

「彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。」

（イザヤ四二・二～三）

私はこの御言を思い起し、味わせていただいた。御霊は私に対しても同様である。御霊が熱心に語っても、私はよそ見しているかその御声を無視して来た。そうゆう聞く姿勢もできていない者に対して、忍耐をもって今日まで導いて下さったのだ。

私は何という思い上りで父を責めたことだろう。

最近はお恵みで、病状的にも精神的にも霊的にも落ちついて来ている。いつかも父に「天国は大丈夫ですか」と聞いたが、「ウン」と即座に答える。身内からみて、まだ頼りない感じもするが、父の状態によってではなく、主によって信仰をもたせていただいている。

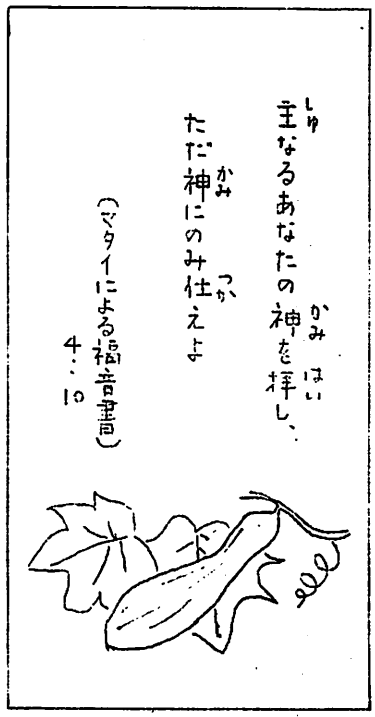
父が倒れて、やがて二年になろうとしている。私が父を負うことが主の御心であるなら負うてゆこうと、ある意味では力こぶを入れてやって来た。しかし、よく考えてみると、負わせていただいたのである。父の信仰のためにと思ってやって来たが、父を通して私の方がいろいろと教えられ整えられた。

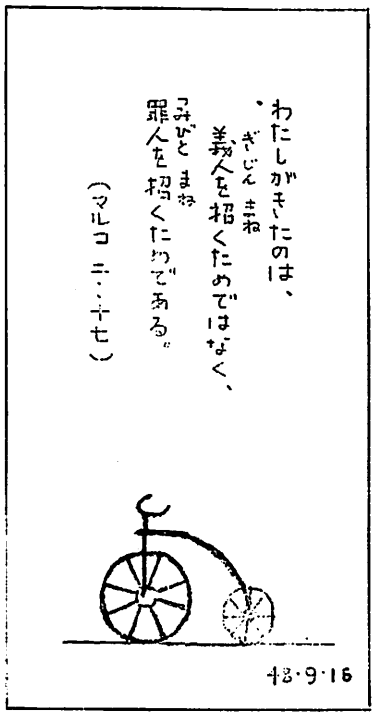
神様は公平な方、恵み深い方である。神様に従う者に必ず報いて下さる。

これから先、父と共に何年歩むか、それはわからない。人間的には父が再びベットから降りることはないだろう。しかし私は、父の枕辺で御言を語ることにしよう。「水をくんだ僕たちは知っていた」（ヨハネ二・九）私は僕となって、ただ御言の水を運びさえすればよいのだ。あとは御霊が働いて下さる。主が栄光を取って下さる。

私は、そう信じている。

昭和四八年「CS御言カード」から





編集後記

。「ぶどうの木」も昭和四十年第一号発行以来、今回で第十五号となりました。

。最初は三十頁のうすいものでありました。その後経費節約のため自分達でタイプ打ったり、ガリ版刷ったりしたこともありましたが、今日、内容ボリュームとも素晴しいものに成長して参りました。

。この二十年間、記され続けた一つ一つの証しは、消えることのない感謝の石塚であり、また神の恵みの軌跡でもあります。

。これからも証しの連がりを続けたいと願っていますので、皆様の投稿をお待ちしています。

。今回も美しいカットを、小松瑞枝姉が担当して下さいました。

昭和60年9月1日発行
編集者　ぶどうの木委員会
発行者　基督伝道隊
　　榎本利三郎
印刷所　トンボ印刷所
発行所　基督伝道隊
　　福岡大濠公園教会
　　八幡前田教会
北九州市八幡東区前田1-10-3